



# 別名分室陰陽寮利休庵 2

---

## 空屋の怪

---

みんな兎

---

繁華街は、クリスマスらしい曲が流れていた。上を見上げると、白い雪化粧を模したリースがアーケードに吊り下げられ、一定の間隔で向うまで続いていた。両脇にある店にも、それらしい電飾やきらきら星を思わせるような飾り。雪の結晶などホワイトクリスマスを連想させる絵がショーウィンドウに吹き付けられ描かれているところ等もある。

地元の買い物客に混ざって、観光客も多い。四条界隈の賑わい。嫌が応でもクリスマスモードを盛り上げる風景になっていた。そのなかに、ぽつん、ぽつんと、寺や、お堂が点在し、そこは飾りつけにはもちろん関係なく、それでも、まわりの風景に違和感なく溶け込んでいる。歳の瀬や正月を控え、のんびりと構えている感じ。

そんな光景も見慣れたもので、野々宮は、そうか、もうクリスマスなんだとちらりと思っただけで、先を急ぐ足を止めなかった。

今、すれ違った主婦たちの、いつもとは違うおしゃれにきめた格好。手に手に高そうなバッグを提げ、楽しそうにおしゃべりしながら、交差する路地のひとつを曲がって行く。ランチなのだろうか。おそらく、いつもよりははりこんだのかもしれない。クリスマスを意識して赤や緑をどこかに見せるファッションをしていた。……。しかし、町はクリスマス一色に飾られているけれど、このなかにどれほどの、キリスト教徒がいるのだろうか。ふと、そんなことを考える。

「クリスマスか……。」

思わず溜息をもらしそうになる。野々宮が、先を急ぐ理由。昨日訪れた、家も、飾られていた。と言っても、今流行の電飾ではないが。古びた洋館の家の庭木に、それらしい飾りがぶらさがり、入り口や、中のドアにはリース。家のリビングにあたる場所にある出窓には、ガラスの器に入った蝋燭。いい年のおじさんである野々宮にはわからなかったが、それは、燃えると良い香が漂うアロマキャンドルだ。銀の盆があり、その上にはリースのような緑と赤い小さな林檎やリボン、金や銀の天使の小さな人形がかわいらしく置かれていた。野々宮は、それを見たとき驚いた。

あるはずがないのだ。そう、そこは、空家だ。電飾で飾られていなかったのは、当然電気が止められているからなのだが、そもそも、ここに飾りつけがなされていることが解せない。古びた家なので、裏口の施錠は確かなものではなく、おそらく、そこから誰かが入ったものだろうと、推測してみる。この家の立地条件も、町中の住宅が密集した場所とは違い、幾分まだ、田園風景が残っているところである。一番近くの新らしい住宅が立ち並んでいるところとは、少し離れてぽつんと、この家は建っていた。そんな訳で、人が勝手に出入りしても、気付かれることもなかったのではないか。

連れの不動産屋が、さっと顔色を悪くした。野々宮は、彼の少し怯えたようなそぶりが気になったが、侵入者がいるなら、このあたりの交番に知らせておいて、見回りを強化してくれるよう、言っておこうと連れを促し、外へ出る。

しかし、誰がこんな物納、税務署管理の立て札のついた建物に、堂々と侵入したのだろうか。い

ったい、どういう神経しているのだ。かわいらしい飾りつけからは、やんちゃな年若い男のイメージはもちろんわかず、若い女の子の姿が浮かぶ。とはいえ、無人のこんな寂しげな家に入り込むなんて、勇気がいるのではないか……。もちろん、野々宮の想像だけで、事実はまったくわからないが……。

建物を一応全室確認して、外へ出た。

連れの不動産屋が足をとめたので、野々宮も何事かと振り返る。

どこからか、バイオリンの音が聞こえた。

「う……わあ。」

不動産屋がばんざいをして、奇妙な声をあげて逃げて行く。野々宮は、動けずその場に張り付いたように立ち尽くしていた。

バイオリンの音とともに、家が揺れる。家鳴りが、きしきしと、多くの人々の気配が一瞬、野々宮の身に迫ったように感じられ、悲鳴と怒号、最後に笑い声が家の中を伝わって、消えた。呆然と、立ち尽くす野々宮。止めていた息を思い出し深呼吸を繰り返す。

すでに、何者の気配もなく、家はもとのように静かな佇まいをみせていた。

これが……。競売にかけても、直前でキャンセルされる原因か。何度もよく判らない理由で、買い手に逃げられ、やっと先ほどの不動産屋があらかた事情は知りながら、内定しかけた。けれど、やっぱり、断ってくるだろう。よく判らない、要領を得ない、怯えた様子でキャンセルの連絡が来るのだ。あまりにも、様子がおかしいので、一度見て来るようにと、上司から言われて来た。野々宮にも、ようやく合点がいった。同時に途方にくれてしまった。二度と恐怖の館を訪れたくはない気持ちは、理解出来たが、これをどう報告すればいいのだろう。野々宮だって、もうここへは近寄りたくはないが……。

結局、すなおに、見たままを報告した。一笑にふされるか、怒鳴られるか……。

それとも、病院行きを勧められるかと思っていたら、野々宮は、別の場所へ行くように言われた。

今この繁華街を抜けて、向かっている先……。ちなみにそこへは、地下鉄を使っても、バスを使ってもすぐ傍に出る交通機関があるのだが、こうして昼時の繁華街をわざわざ、歩いているのには、わけがある。普段はまじめな野々宮も、半信半疑で、さすがに、気後れを感じていた。少し、歩いて落ち着いてから行こうと、遠回りをした。しかし、それでも、目的地にはつく。御池通りの横断歩道を渡り、ZESTという地下街に入る入り口の赤い文字を横に見て、通りに面した洋館、装飾が一見古い時代の銀行を思わせる建物、野々宮は、京都市庁舎に入って行く。そこで、風致保全課を探して、聞いてみる。

0班……。ふざけた感じた。一応、朝電話で連絡をとってはいたが、まだ騙されている気分だ。ほんとにあるのかよ、と。野々宮は、おそろおそろきいてみると、中の職員がふつうに場所を教えてくれた。まったく、あたりまえの対応で、怪しげなところは見当たらない。教えて貰った、ドアの前に立ち、ノックして扉を開ける。

中から、飛び出さんばかりに急いで出ようとした若い職員とぶつかりそうになる。

「わあ……！すみません。」

「いや・・・。」

若い職員は、二十代か。大学でたてぐらいの、新人に見える。どこにでもいそうな、平凡な感じの青年だ。彼は、野々宮に驚かせた侘びを言うと、名前を訊ねた。

野々宮が名乗ると、彼は大きく頷く。

「朝連絡いただいた野々宮さんですね。辻と申します。電話の応対に出た者です。」

「ああ。」

確かに、声の感じも若かった。野々宮のちょっと要領を得ない今朝の連絡にも、心得たようにきばきと答え、もっと年は上かと想像していたのだったが。

野々宮が、名刺を出して、辻に渡す。辻は丁寧に名刺を持つ手に、もう片方の手を添えて受け取る。辻からも名刺を渡され、あいさつが始まる、あたりまえの光景。

「野々宮と申します。今朝はその・・・要領を得ない話し方をしてしまって、申し訳ない。」

「いえ。気持ちはわかりますから。ここへも、半信半疑・・・といったところで来られたのでしょうか？」

「はは・・・。」

本当にあるとは思わなかった・・・とは、さすがに口に出せず。野々宮の引きつった笑いにも、辻は、まったく気を悪くしたふうもなく、中へ案内してくれた。

扉に入ってすぐのところは、資料がいっぱいならんだ資料室のような趣で、その奥に、扉のない入り口がぼっかりと開いていて、その向うに事務机が並んでいる。意外と、沢山の机が並んでいるが、がらんとしていて、手前の机のパソコンにむかう、五十台ぐらいの男が一人座っているだけだ。

「鴨居さん。僕、これから出張なんです、野々宮さんの件どうしましょう。急ぎなら、今日の分をあとまわしにして、これから、一緒に出かけて来たほうがいいでしょうか？」

「いや、僕が手配するよ。さっき利休庵に電話したら、美夜ちゃんが今日でもいいって。もし、このまま野々宮さんの都合がいいなら、立会ってもらって、祓ってもらおうと思う。」

「あ。そういえば、あの場所。他からも、苦情がありましたっけ・・・。」

なんのことだと訝しげな野々宮の顔に気付き、辻は鴨居との会話を打ち切り、部屋の片隅に置かれてある、黒い皮のありふれた応接セットに案内し、茶を淹れてくれた。

「辻君。早く行かないと、時間に遅れるんじゃないか？」

鴨居の言葉に、辻が頷く。

「明月さんなら、まだ、爆食中だろうから、待たせることはないと思います。」

鴨居に答え、野々宮には。

「・・・すみません。電話で受けたのは私ですが、これから行かなければならないところがあって、こちらの鴨居が対応することになります。」

野々宮の前に、鴨居が座る。野々宮には、どちらでも構わない。この怪しげな一件から早く解放されたいと思っているので、電話で伝えた内容とほぼ同じようなことをもう一度、話し始める。それを、途中まで見届けると、辻は、そそくさと、出かけて行った。

鴨居は話を聞いても驚く様子もなく、何か書類のようなものに書き込みをいれ、それを野々

宮に見えるように示した。

「立会いは、依頼が原則公的機関の場合はこちらの職員・・つまり私ですね。と、そちら様の職員、つまり野々宮さんが、現地で見届けるということになってますが。こちらの、報告書をあげてくるだけでいいという場合もありますが、どうされますか？」

「え？」

「現場の状況によっては、危険も伴うことも有りうることで、こちらで勝手に処理するということも、あるということです。」

「それじゃあ、鴨居さんは、・・・・・・・・。」

もしかして、この人が霊能者・・？さっきの辻って若い子も・・。公務員にお祓い屋がいるのかと、野々宮は考える。各所に手配してくれると、彼は聞いて来たのだ。

鴨居が顔の前で手をぶんぶん横に振って、笑う。

「いや。違いますよ。祓うのは、別の人。それは、確かな人に依頼がいきます。でも、事務的処理のこともあるし、事後を見届けなくちゃならない、決まりなんで・・報告書のこともありませんしね。」

「はあ。そうなんですか・・。」

「私は、逃げ足は速い方でして・・。たまに、危ないこともありましてね・・。野々宮さんは、走るの速いほうですか？」

「そうですね・・。学生時代はサッカーやってましたから、何もやってなかった人よりは、ましなんじゃないでしょうか。報告書書かなくちゃならないいんじゃ、行くしかないですわね・・。」

「行かれますか。では、こちらの依頼書に担当の方、つまり、野々宮さんが記名いただいて、報告書は後日郵送ということで・・あ、判子もお願いします。」

野々宮の前に、示された紙。野々宮は、のぞきこむように、しばらくじっと見つめていたが何の変哲もない、ただの申し込み用紙なので、言われるまま、記名をする。

ぽんと、印鑑を所定の場所に押して、用紙の向きをぐるりと変えて、鴨居に返す。鴨居は、他に記入漏れがないか確認し、ないことを確認すると頷く。

「では、現地へ参りましょうか。」

促されるまま、野々宮は立ち上がり、鴨居についていく。庁舎を出て、野々宮は、またあの、恐怖の館へと向かうことになった。

庁舎から歩いて程遠くない喫茶店、利休庵。木造二階建ての、表の窓に木の格子のはまった、京都に古くからある町家の佇まい。その店のドアを開けて入って行くと、中はテーブルと椅子、広がる大理石の床があり、洋風だ。中央にカウンターがあり、表側の席と奥まったところにある席とを分けている感じだ。奥は、中庭に面していて、前面天井までガラス張りになっていて、普通の町家のイメージからしたら、随分明るい採光になっている。ところどころ、窓の枠や壁、梁など落ち着いた色目の木が使われていて、それが、テーブルや椅子、つるつるの床、カウンターのステンレスの使用されたキッチンなど、現代的なものと、もともとのこの建物のもつ和風のイメージを上手く、統一していた。

カラン、カラン。ドアのベルの音を聞き辻は、通いなれた店に入って行く。店を見渡すと、目的の人物は、奥の中庭の見えるテーブル席で、珈琲を飲んでいた。彼の他には、お客の人はいない。

「いらっしゃい。」

このマスターが、ティーカップに熱い湯を注いで下を向いていた顔を上げて迎えてくれる。

「こんにちは。遅くなってしまいました。明月さんは、もう食べ終わってますよね。」

「さっき満腹中枢に達したみたいだけど、まだ、珈琲おかわりすると思うから、辻さんもちょうと一服してったら？」

「そうですね。じゃあ、何か体のあったまる飲み物を。」

「風邪予防に、柚子茶。生姜茶。ココアにマシュマロを浮かべたのなんかも、あったまるよ。」

辻は、ちらりと明月の前のテーブルに置かれた重ねられた大皿を見て、顔を顰める。

「えっと、甘すぎるものはちょっと……。柚子茶お願いします。」

マスターに柚子茶を頼む。辻は、明月のいる方へ向かう。

「すみません、遅くなって。出掛けに、来客があって、ちょっとバタバタしちゃって……。」

「え？ああ、かまわないよ。今、食べ終わったところだから。」

赤みのつよい茶髪の青年が辻に答える。その青年……明月は、茶髪以外は、穿き古したストリートタイプのジーンズにTシャツ、フリースの上着、ユニクロですべて買い揃えられるような普通の格好をしている。黙っているとそれなり迫力があるが、話し出すと、こちらが思っているよりも気さくに答えてくれる。辻は、この利休庵で、この明月と待ち合わせて、お祓いの仕事を片付けに行く。明月は、ふだんは占い師をやっているが、お祓いの仕事も時々引き受けている。利休庵のマスターは、仲介者だ。自身も仕事をするが、辻たちに明月のようなお祓い師たちを紹介してくれるのがメインだ。辻は、今の部署に配属されて日は浅いが、しょっちゅう、ここを訪ねて、依頼の仲介を頼みに来る。市内の苦情のある、怪奇スポットを確かめて、必要なら祓う仕事をするのが、辻のいる部署なのだが、所属するのは、辻と鴨居、長期療養しているもう一人と三人で、うち療養中のこの一人を除いては、お祓いすることは出来ない。なので、ここに外注に来ているのだ。

辻は明月と、仕事することが多い。

辻は、テーブルに重ねられた大皿を見る。相変わらず、胸が悪くなりそうだ。甘い香りが残っている。明月は、お祓いの前に、大量のスイーツを食す。

慣れてはいても、やっぱり、こちらまで腹がいっぱいになりそうだ。そんな辻の前に、マスターが湯気の立った湯のみを置く。

ふわりと柚子の、柑橘系の爽やかな香が鼻をくすぐり、気分を楽にした。分厚い陶器の器を両手で持つと、熱い湯の熱がじんわりと手のひらに伝わり、体まで温めてくれそうだ。手を温めながら、ゆっくりとふうふう冷まし、中の柚子茶をいただくと、外を歩いてきて冷えた体もあたたまり、ほっこりする。

ふいに、辻の隣りの席に、誰かの気配がする。横を向くと、うさぎが座っていた。

「辻も明月も、時間にはルーズなのだ。」

うさぎが手に持った目覚まし時計を得意そうに持っている。

「時計くん。今、何時なのだ？」

「二時十五分・・・あれ？三十秒遅れている・・・っと、直さなければ。」

手足のあるへんてこな時計は、店の壁に掛かっている時計を見て、自分の時刻を調節している。

「最近の時計は、自動で時刻を修正できるなんて、便利だな。古ての自分も、ちゃんとせねば、墓場行きになってしまう。」

「おお。しっかりしろよ。ビジネスには、時間が大事なのだ。時計くん。」

自分で針を回して、時刻を合わせる。ある種、最新と言えるのではないだろうか・・・。その話す時計の持ち主も、人ではなく、二本足で歩くぬいぐるみのようなうさぎ。シュールなこの光景も、辻には見慣れたものとなりつつある。明月は、阿呆かという顔で、うさぎたちのやり取りを見ている。

うさぎが、明月に。

「ビジネスするのだ。明月、仕事をよこせ。」

ズズーッ。明月の珈琲をすする音。ちらりと、うさぎに向けた目は剣呑で、きらりと光る。

「今日は、いらぬ。というか、はよ成仏しやがれ。」

「うおお。何度言ったらわかるのだ。我は、式神！」

うさぎは、明月の式神だ。そのわりに、主に対して態度がでかい。

「知るか。勝手についてきたんじゃん。」

「封印を解いて、名前をつけたものが、主になる決まりなのだ。」

「主、主って古臭いこと言うなよ。だいたい、いつも好き勝手に過ごしているじゃないか。別に好きなように暮らせばいいだろう？誰が、決めたんだ、そんなこと。」

「うう・・・最初の主・・・。」

「ふうん？今日はお留守番。この店から、出るな。もこもこ。」

もこもこって、変てこな名前だなあと、横から見ていた辻は思う。名前を言って、命令を伝えれば、式神は主に従うと、あとで、明月が辻に教えてくれた。

しょんぼりして、耳の垂れたうさぎの前に、マスターがティーカップを差し出す。

「おいしいよ。どうぞ。」

カモミールのりんごに似た甘酸っぱい香が漂う。勧められるまま、ずずっとすすむうさぎ。垂れていた耳が、ぴょこんと立ち上がる。

「雑誌、読もうっと・・・。」

うさぎは、カップを持って、カウンター近くに置かれたロッキングチェアに座り、雑誌を読み始めた。

「いいんですか？」

「いいの。いいの。」

辻に答える明月。

からん、からん・・・。ドアのベルが鳴り、利休庵にちょうどその時、お客がひとりやって来た。

少し慌てた顔で、マスターが振り向いたのは、うさぎがいるからなのか・・・。辻が、ロッキングチェアの方を見ると、うさぎはちゃんと姿を消していた。

ああ、やっぱりお客はあるんだ。辻は、思った。自分のことではないがほっとする。彼が、仕事の依頼でここへ来るときなど、ほとんど他のお客に出会ったことはない。ちょうど、出て行く客なんかは、何度か目にしたことがあるが、大概関係者しか、みない。おかげで、堂々と怪しげな話をしているわけだが、お客が他にいないんじゃない店は、つぶれてしまうのではないかと、密かに心配していたのだ。マスターが、うさぎの存在を気にして慌てているようなので、ふつうのお客なのだと、辻は推測する。

「いらっしゃい。」

「ああ。よかった。やっぱり、この通りだった。何だが、一本道を間違えたみたいでね。ここの珈琲がおいしいって聞いて、来てみたんだが、やっとみつけたよ。」

「ああ。碁盤の目のようで、方角がわかりやすいけれど、道幅も風景も似ていて、間違えそうですね。」

「そうそう、路地なんかに入ると、もっと迷うよ。」

カウンターに腰掛けたお客は、珈琲を頼むと、コートを脱いで寛ぐ。

辻と明月が立ち上がり、出て行こうとするのと目が合う。

「あ、なんだ。幽齋さん。」

明月が、そのお客を見て、にっと笑う。

「やあ。君がここの珈琲が美味いって言っていたから、さっそく来てみたよ。」

幽齋は、ほがらかに答える。マスターの淹れている珈琲の香りが漂い、幽齋はくんとその匂いを嗅いで、リラックスしている。

明月は、事情がわからないマスターと辻に、幽齋を紹介する。明月のふだんの仕事、占い師をしている占いの館というところで、同じく仕事をしている人だと、言う。

「顔馴染みでね。いっつも休憩時間にお茶やおやつをごちそうになったりしてるんだ。淹れてもらうお茶がおいしくてね。名前覚えられないけれど、中国のお茶とか・・・凝り性なんだよね？」

」



「うん。人にたくさん会う仕事をしていると、リラックスする時間が必要なんでね。お茶をいれてると、それまでのことをリセット出来る。」

ほのぼのと答える幽齋は、いくつくらいだろうか……。真っ白い髪に、皺も年月を物語っている。いくつくらいなんだと、辻が後で聞いた時、たしか世間話で、戦後の混乱期の話を聞いたことがあり、その時子供だったと会話の中で言っていたことがあるが、正確な年はわからないと、明月が教えてくれた。

幽齋は、珈琲も好きなのだそうだ。けれども、豆の挽いたのは買ってきても、長いこと置いて置けない。香りが飛んで、風味が悪くなるのだ。これだけ色々な種類のお茶をかわりばんこに淹れていると、珈琲の出番も少なくなる。それなら、近くにおいしい店があるからと、明月が教えた。

話しているうちにマスターが、珈琲を淹れて、幽齋の前にカップを置く。

「へえ。そうなんですか……。通の方のお口に合うかどうか。緊張しちゃうな。」

「いえ。通ってわけじゃ……。珈琲の味には、ほんの少し思い出というのかな……。あるんですよ。」

幽齋は、ひとくちカップから珈琲をすする。

「美味しい。」

マスターがふわりと微笑む。

入れてもらったんだ。当時はまだ物のない時期で、珍しい品だよ。まだ、ガキだったから、有難かったけれど、一口飲んで閉口してしまった。それでも、後から香るこの香りにね。誘われて、結局飲み干してしまった。以来、珈琲は好物ですよ。」

「なるほど、いい思い出とワンセットになってるんですね。」

「いや、そんなもんでもないがね……。」

幽齋は、また一口珈琲を味わう。その苦味が舌の上に広がる、そんな顔をして、笑っている。マスターは、夕方の定食の下ごしらえの用事にかかり、会話は途絶えた。

「それじゃあ、これで。」

明月も辻も、先を急ぐので、挨拶を残し、利休庵を出て行く。

お祓いの仕事を片付けて辻が、明月と分かれて庁舎へ帰る途中、着メロが鳴り響いた。携帯に出る。

「ええ！どこですか……。？ええ、わかりました。明月さんとはさっき、別れたんですけど、夕飯食べに利休庵へ行くって言ってました。はい、連絡とってみます。」

その日、辻はもう一度、利休庵を訪れることになった。

一方、庁舎を出たばかりの鴨居と野々宮は、駐車場で鴨居の車に乗り込み、河原町通りに出る。出町を通り過ぎ、もうすぐ、賀茂川に架かる葵橋というところで、歩道から手を振っている女の子を見つける。美夜だ。今日はさすがに、彼女がいつも着ているようなちょっと行き過ぎかもしれないチラ見せファッションはしていない。コートは前を開けて、羽織っている。中には、同じ長さの長いミニワンピースとしても着れるセーター。下に細身のジーンズを合わせている。セーターはかなり襟ぐりが深く開いていたけれど、いつもの彼女の格好からしたら控えめだ。この間、鴨居が利休庵で見かけたときは、へそだしTシャツを着ていた。仕事なので、それなりに考えているのか……。大きなエコバッグを二つ肩にかけていた。

車を脇に寄せる。ボタン。後部座席のドアを開けて、美夜が乗り込んできた。

「鴨居さんの車って、昔の映画とかに出てきそう。右ハンドルだから、外車じゃないよね？」

「ああ。トヨタのパブリカって言うんだ。これを買ったのはもう随分昔だ。」

昭和40年代ぐらいの話だ。小さくて、四角い車体、ライトは丸くてカエルの目みたい。どこか、古い洋画に出てきそうなイメージの車だ。美夜は、もの珍しそうにしている。助手席に乗った野々宮は、この車のことを知っていたが、二十歳ぐらいの女の子だから知らないのだろうと思う。それにしても、よく走っているよな、この車。野々宮は、駐車場で始めこの車を見たとき、思わず「この車走るの？」と口走ってしまいそうになった。「随分、年代物に乗ってますねえ……。」という感嘆にとどめておいたのだが、鴨居はうれしそうに、この車のことを説明した。自分で、手入れもするようだ。その話のおかげで、初対面であるにも拘わらず、会話がはずみ、野々宮も気まずい沈黙にさらされずに済んだ。美夜という女の子も、気軽に話しかけられるタイプのようなのだ。

鴨居が、野々宮と美夜の双方に、簡単に紹介する。

「はじめまして野々宮さん。美夜です。」

美夜がにっこり笑う。マスカラで濃く、大きく目を描いた目力を強調した今風の化粧。迫力がでて、ちょっと強い感じだが、もともと素の顔は可愛い顔立ちなので、笑うと親しみやすさが出る。野々宮は、おじさんなので、若い女の子と話すのはちょっと照れくさそうだ。

「きょうは、よろしくお願ひします。……すごい、荷物がたくさんだね……。」

後部座席に座る美夜の横には、中身のいっぱい詰まったエコバックが二つ。お祓い家と聞いていたから、てっきりその道具かと思い、野々宮が訊ねる。

「これ、お買い物の帰りだから。珈琲豆。お店用じゃないですけど。出町にある輸入食品店へよく行くんです。それと、パン屋さんもお気に入りがあって、たくさん買って来ちゃった。」

「……………」

目を丸くしている野々宮。運転席でハンドルを握っている鴨居の目が笑う。

「野々宮さん。今、なあんだって思ったでしょう？お祓いの道具じゃないんで……。」

「はは……。」

答えようもなく、愛想笑いでごまかす。

野々宮の反応に、美夜が目をぱちぱちさせてる。

「ちゃんと、必要な物は持って来てます。ほら。」

エコバックの荷物の上にちょこんと小さなカバンが乗っている。布製のファスナーのついた四角い小さな手提げを持ち上げて、野々宮に示す。

「お祓いって・・・祭壇とか、木の枝・・・えっとなんて言ったけ？ 榊？ そんなのが、いるんじゃないの？」

「え？ 神道じゃないから・・・。祭壇は、どんなのを想像しているのかしらないけれど、大掛かりなことをやらなければならないなら、現地行って見てからですけど・・・私では無理なので、誰かに交代させてもらいます。」

「へえ・・・。じゃあ、その中身は？」

美夜が中身を見せてくれた。白い短冊のようなものに、墨で何か文字のようなものが書かれた、おそらくは御札だろう。まだ真っ白なままの何も書かれてない紙もいく枚か含まれていた。黒い油性ペンが一本。何に使われるのだろうと、野々宮は思う。

「これは、符が足りなくなった時、この何も書かれていないほうに書いて使うんです。墨なんか磨ってる暇ないから。」

「なんか、ありがたみないなあ・・・。」

「そうですか？ あ、そうだ。これをお持ちください。」

ちょうど目的地についたので、車が止まる。鴨居は、その家の敷地内にはとめず、手前の道路の脇に駐車する。美夜は、野々宮と鴨居に護符を渡す。

「身につけておいて下さいね。やばいと思ったら、外に逃げて。」

目的の洋館、野々宮が勝手に恐怖の館と心の中で名付けてた家の前に、立つ。

ガチャリ。キキ・・・。古いドアが重苦しい音を響かせた。

ぐっと、体に力が入り、一步前へ踏み出す。鍵を開けて、中へ入った。

「わあ。すごい・・・。」

先頭に立って入っていく美夜が声をあげる。彼女の目には、普通の人には見えないものが映っていた。無人の筈であるこの家には、沢山の気配が満ちている。

一番広い、リビングに集って興じる人々。着飾った人々の幻影が行き来している。リビングは大きく、特に庭に面した部分が広くとってある。出窓があり、その横には庭から出入りできる大きな窓もある。つるりと光沢のある床にその窓の枠が現実の影を落としていた。するすると、白い影が、あちこちの部屋を往来し、バタンバタンと、どこかで悪戯な音を立てる霊たち・・・。

美夜は、持ってきた布のカバンのファスナーを開け、中から、方位磁石をとりだした。家のほぼ中央あたりで、手のひらのそれを見ている。

「・・・すごいね。これ、パーティでもしているのかな。」

「・・・うん。なんだか、おかしい具合だわ。すべての部屋を見て回ったわけじゃないけれど、

悪意も敵意も感じられない。この霊たち、ここに執着とか、なさそうなんだもの。」

鴨居の感想に、美夜がマジックで白い符に何か書き込みながら答える。野々宮は、無言で呆然と前方を見つめているので、彼らと同じものが見えているのだろう。青ざめている。

「どこから、流れこんで集まって来ているみたい。」

美夜が目を僅かにすがめてあたりを見回している。

野々宮が、ごくりと唾を飲み込み、やっと言葉を発した。

「ここに、進入した形跡のあったクリスマスの飾りつけがない……。」

「クリスマスの飾り？」

美夜が眉をひそめる。野々宮が頷く。

「ドアのところにリース。庭にも、ツリーの飾りのような……あ、すべての扉にリースは飾られていたな……。交番に侵入者のこと、一応言っておいたから、撤去してくれたのかも……。」

美夜は、首を少し傾げている。クリスマスのリースは、もともと精霊を迎えるための物だ。定期的に悪戯かもしれないが、知ってやってたのなら、この状況を悪くしないためのものかもしれない。……そんなことを考えたが、首を横に振って、美夜は自分の考えを否定する。

「悪戯でも、よかったのかもしれないわ。お陰で、悪意のあるのは寄って来ていないみたいだから。」

「？」

「クリスマスリースって、精霊を歓迎するものだから……。お正月の注連縄とは、少し違うけれど、神聖なものの為だから、悪意を持ったものが入り込みにくかったのかも。」

「へえ……。」

美夜がこれもまたバックの中から細い紐を取り出して、それを床に丸く円を描くように置く。野々宮は、美夜に促されて、その円の中に入る。鴨居は慣れたもので言われずとも、その中に入ってじっと立っている。

「じゃあ。符を貼って来るから、その中から出ないで待っていて下さい。」

美夜がばたばたと部屋を出て行く。

取り残された野々宮は、不安そうに鴨居のほうを見る。この紐は何なんだと、視線がぐるりと床に周回を描いた。鴨居が口を開く。

「これは、結界なんだそうだよ。」

「結界……？」

聞きなれない言葉だ。バリアーみたいなものだよなどと、意味はなんとなくではあるがわかるが、この紐一本の丸い小さな空間が自分たちを周りの幽霊達から隔てて守ってくれているなんて、不安だ。

野々宮は、スーツのポケットをごそごそさぐり、タバコの包みをだす。吸ってもかまわないかと、鴨居に示す。鴨居は、どうぞと頷いた。

ライターで火を点け、タバコを銜える。ふうっと、煙を吐き出す。

「すみません。落ち着かなくて……。」

「ああ。別にいいよ。」

「でも、鴨居さん吸わない人でしょ？」

「え？」

「車には、タバコの匂いがしなかったし、職場にも、来客用のテーブルしか灰皿がなかった。」

「ははあ。なるほど、よく見てますねえ。」

鴨居ののんびりとかまえて待っている様子が、野々宮の気持ちを落ち着かせた。

目を前方に転じると、白いシルクのドレスを着た女性が横切っていくのが見えた。

真珠の長い二連のネックレス。ノースリーブでローウエストのすんとした薄いシルクのドレス。髪はおかっぱ、片方の耳が見えていて、そちらに蝶の髪飾りがついている。モガという言葉が浮かんだ。そうかと思うと、羽織袴で帯刀の人物。あきらかに、生きていた時代が違う。だが、現代の新しい幽霊らしきものはいなかった。彼らは、お互い目があっても、互いの存在が見えていないのか、干渉しあうこともない。色々な時代のドラマを一度に見ているような気がした。

「なんだかなあ……。仮装パーティに参加しているみたいだ……。」

と、野々宮の言葉。鴨居も、もの珍しげに、仮装パーティを見ている。

美夜が部屋に戻って来た。

「まだ、そこから出ないでね。」

そう言うと、美夜は手を前に、組む。指が独特の形をかたどり、野々宮にはわからなかったが、呪文のようなものを唱え、それに合わせて、指の形も変化しているようだ。

シーンと、静まり返り、空気がそれまでと変わったと感じる。凍りついたように、そこに満ちていた気配たちは止まり、美夜が呪文を唱え終わった時には、静かに、まわりの空気に溶けていった。

終わった……。何も見えなくなり、野々宮はふうっと肩の力を抜く。隣りの鴨居も動いた。「浄化はしたけれど、この建物集まってきやすいみたいだから、出来れば建物は壊して更地にして売ったほうがいいかもしれない。」

美夜が言った。紐を回収してバックに入れる。

ピシリ……。！何かが、割ける音が美夜の耳に届く。

「え？」

シュッ！美夜の手の甲に切られたような赤い線が走る。

「まず！早く、外へ出て……！」

美夜が真っ青になって叫び、その声に押されるように転げるように玄関に向かって走る。

轟と、家中が家鳴りで揺れだす。床がぼこぼこゆがみ、突風のような風が家中を駆け巡る。

「え？」

玄関を出るところで野々宮が急に足を止め、振り向く。声を聞いたような気がした。

「野々宮さん！あぶない！」

鴨居と美夜が、立ち止まった野々宮に覆いかぶさる。

ビュン……。！家の中から、箒が飛ばされてきた。

「きゃあ！」

「うわあ！」

風に飛ばされて来た感じの箒の柄は縦に斜めに、野々宮に左右から覆いかぶさった鴨居と美夜の肩をバシッと打つ。痛みに気をとられている暇はあるはずもなく、二人は野々宮の背を押し出し、自分たちも玄関を出る。

建物から少し離れたところで、地べたにへたり込む。

「痛ったあい・・・。」

呆然と立ちすくんでいた野々宮だが、美夜の声にはっとし、箒に打たれた美夜と鴨居の具合を尋ねる。かなり、打ち身がひどく、病院へ行くことになった。

鴨居のパブリカは、野々宮が運転して、病院まで行き、美夜と鴨居は診てもらった。幸い骨には異常はなかったが、かなり打ち身がひどく、腫れ上がって、しばらくは腕が上がらないだろう。美夜のお祓いが、失敗したのだと野々宮にもわかった。手あてを終え病院の待合室で一息ついていると、辻が駆けつけて来た。

事情は、病院に入る手前で鴨居が彼に連絡をいれ、説明がなされていた。

「なんか、大変だったね。」

辻が、車のキーを鴨居から受け取り、美夜に話しかける。

「うん。あそこにいたのは単純に消せたんだけど……。まさか、反発があるなんて。それに、あの箒いったいどこから飛んできたのかしら。」

「反発？」

美夜が、後部座席のドアを開け、車の中へ入る。二つ向うの車のドアが開いて、人が降りて来たのを見ていたので、人の出入りのある駐車場であるのを気にしたのか、声高に説明するのを避けたみたいだ。ボタン。ボタン……。と、野々宮も鴨居も、辻も、車に乗り込んで、ドアを閉める音が続き、辻がキーをまわして、パブリカのエンジン音が響き、車が駐車場を出ると、美夜はその続きを説明した。

「野々宮さん。あの家の持ち主は、亡くなってるんでしょう？」

「ああ、亡くなってる。あの家は、遺族が相続税のかわりに物納というかたちで、今は競売にかかっている。」

「亡くなった人に、特に執着があったとかは？」

「さあ。詳しい事柄までは……。辻さんに電話した時、分かる範囲で事情は調べてくれと言われたから、調べてみたけれど、大した事情はわからなかった。遺族はみな、地元にはいないし、それぞれ資産家だ。執着があったなら、あそこを維持するくらいは出来たと思うけれど……。そもそも、自宅にはなっていたけれど、持ち主は便利な町中のマンション暮らしだったそうだから……。」

「ふうん。だったら、持ち主は関係ないのかなあ。あそこ、いろいろな霊が流れて来ていたようなので、それがどこから湧いてきたのかもちょっとわからないけれど。」

「わからない？」

「うん。立地条件からみても、ああなるはずないと思うんだけどなあ。」

悪意や、独特の暗さは感じられなかった。侵入者を嫌い、沈黙をする例もあるけれど、入った時からすでに賑やかな状況だった。こちらの出方に、態度を変えたのか。それともあの中に隠れていたのか……。？美夜が、反発といった意味を説明した。

「なるほど、すると怒っていたってことなのかな……。」

野々宮のつぶやきに、美夜が目を見開く。くすくす。笑う。

「野々宮さんって、いい感性してるねえ。」

「……………」

誉められてるのか、眨されているのか、美夜は楽しげに笑っている。それまで彼女が、少し落ち込んでいたのが、野々宮にも見てわかったから、まあいいかと気にとめないでおく。ハンドルを握っている辻が美夜に。

「そういえば、美夜ちゃん。駐車場で人がいるので話の続きをするの気をつかったろう？」

「あたりまえやん。こんな話、変な目で見られたくないでしょ。そっち関係の話って、あたし、

知らない人の前でしないもん。うそくさい目でみられるか、良いところオタクにみられるだけやん。」

意外。一応、人目は気にすることもあるのか……。普段のあの格好なら注目を集めてもいいわけだ。辻は、心の中でつつこむ。

「ああ。もう、あたしの手を負えないから、バトンタッチするかあ。誰に頼むのがいいかな……。」

「それなら、明月さんに連絡しときました。」

「……………」

辻は、野々宮に美夜と交代するお祓い師、明月について軽く説明をする。

話しているうちに、戻って来てしまった。車は、庁舎の方へ止める。利休庵で、明月が待っているの、歩いてそちらへ向かった。

カラン。カラン。ベルの音を聞きながら、ドアを開けて利休庵へ入って行く。

「おかえりなさい。ああ。鴨居さん、美夜、ふたりとも怪我の具合は？」

入ってきたとき、意外に元気な姿を見て、マスターはほっと胸を撫で下ろしながら聞く。野々宮は、鴨居から美夜が、このマスターの娘だと聞く。

「大丈夫。飛んできた物に当たって、打ち身になっているだけだから。」

「あ、これ、美夜……………」

美夜は、すたすたと奥の中庭に面した席に座っている明月の前の席にどんと座る。珈琲を飲みながら、のんびりと構えていた明月が、ちょっと片方の眉を上げた。

「あたしでは、適わないし、しょうがないから、バトンタッチするわ。詳細は、何でも訊いてちょうだい。」

「ま、経験不足もあるかな……………」

明月の視線が美夜の手の甲に張られた絆創膏にそそがれる。美夜も、つられて視線を自分の手に落とした。これが、何かと言いかけて、目をぱちぱちさせる。

「どっち側の符が駄目になったんだ？わかるか？」

「あ……えっと、たぶん北側のどれか。風は、向うからしか流れてなかった。」

「そうか。特定できないのか……………」

傷は、符が破られた時、術も返されてその反動で出来たと、明月は、あとからやって来た事情のわからない野々宮たちに説明した。

「符はおそらく北側のどれかが、破れているか、まったく粉々になっているかしていると思う。美夜の傷は、術がはじかれて出来たものだから、偶然の出来事で符が駄目になったんじゃない。たぶん、その場所に何かあるんだ。」

「まさか……死体が埋まってるとか、推理ドラマみたいなことはないですよ？」

野々宮が、青ざめて言う。

「いや……そこまではないと思います。そんな事情なら、集まってくる愉快的なやつらは説明つかない。」

明月も、その時の状況を辻から連絡をもらって訊いている。それと、重ね合わせて話している



のだ。明月が野々宮に向き直る。

「ともかく、下見はしてきます。それから、連絡をいれます。」

「最後まで責任持って見届けたいんだ。付いて行っては駄目かな・・・？」

「・・・・・・・・。」

「あ、それなら、私が車出します。」

辻が気を利かせたのか、沈黙している明月に言い添えた。別に、足がどうのと、しぶっているわけではないのだが・・・・・・・・。明月は、ほんの少しだけ目を細めて、野々宮に視線をあてた。

「ま、いいですけど。今日は本当に様子見だけですよ。」

「ああ。」

野々宮が頷く。話のなりゆきに美夜が自分も行くと言い出した。

「責任を感じてるなら、今日はこのまま休んだほうがいい。後日、手伝ってもらえることがあれば言うから。」

「・・・・・・・・わかった。」

明月が強い調子できっぱりと断る。美夜も、さすがに食い下がることも出来ず引き下がる。はあ・・と肩を落とす美夜に、辻が慰めの言葉をかける。

「大丈夫だよ、美夜ちゃん。そのうち、活躍の場がまわってくるさ。」

「ありがとう。辻さん。今度、おいしいお茶を淹れてあげるね。」

美夜がゆるく笑い、いってらっしゃいと手を振る。けが人の鴨居を残して、明月にくっついて野々宮と辻が利休庵を出て行く。彼らが去って行ったあと、美夜はぼんやりと、テーブルに座っていた。

コトツ。自分の前に、カップが置かれる。あ、ココア・・・・・・・・。美夜は顔をあげた。

「ありがとう。お父さん。」

美夜の好きなマシュマロ入りのココア。マスターが、少し目を細める。あつあつの湯気が立っているの、飲み干すには時間がかかる。その間に、ゆっくり心の中も整理できるのだ。ふうっと、ココアの入ったカップに息をひとつ吐いてみて、つんつんとスプーンで溶けかけのマシュマロをつつく。それから、まだ、残っていた鴨居の方を見る。

鴨居は、熱いほうじ茶を味わっていた。何、と鴨居の視線が美夜をみる。

「鴨居さん。今日のごめんなさい。力不足で・・・・・・・・。」

悔しい・・・・・・・・という、美夜の心の声が伝わってきそうだった。

「力不足なのは、別に気にしないで、いいんだよ。美夜ちゃんは、ちゃんと自分に出来ることと、出来ないことがわかってる。いつも、ここまでって思ったら、代わりを見つけて、放りだしたりしないだろう？」

「でも・・・・・・・・。」

「自分で何とか出来ない、もどかしい気持ちはわかるよ。だけど、仕事だからね。ま、若いから、仕方ないか。いずれ、自分の力量と折り合いつけられる。」

「・・・・・・・・。」

鴨居が穏やかにこたえる。美夜が、目を見開いている。体から力を抜くように息を吐いた。

「もしかして、経験不足って、そっちの意味・・・。」

明月の言葉を思い出した。少し、急ぎすぎたのもあるかもしれない。突発的なことに対処出来るすべも少ないなら、下見はするべきだった。それでも、分かったかどうかわからないが、簡単に流しすぎてもいけない。同行者の安全を確保しなくてはならないから・・・。美夜は、カップのココアを飲みながら、思う。

それにしても、自分とあまり年の変わらない明月に言われるなんて・・・。あれ？美夜は、父親の顔を見る。

「経験不足って、明月だって、そんな年変わらないよね？」

マスターが、ちょっと笑って、首を横に振る。

「・・・明月君は、子供のころから、やってるから・・・。」

「え？」

マスターの言葉に、目がにゅっと細められ、おもしろいものを思い出した鴨居の顔。

「ははあ。そういえば、始めて会ったのは、中坊だっけか・・・。みょうに、ふてくされたがきだったな。そのくせ、敬語はちゃんと使えてた。今の方が言葉遣いがいい加減なくらいだね。どういう経緯で、仕事についてるのか、僕はきかなかったが。マスター、どういうつてだったんだい？」

「彼の父親と面識があってね。手が足りなかったんで、応援を頼んだら、好きにこき使ってやってくれて、息子の明月君を寄こしてくれた。」

「親父さん？も、同じ、お祓い師だよねえ・・・。辻君は、お寺の子だと思ってるけれど。」

美夜が、鴨居のその言葉を聞いてくすりと笑う。

「・・・説教とか、説得とか、そういうのばかりだから、そう思うかも。」

「何ていうか・・・陰陽師とか、そういう種類の間人だろう？使っている術が、そうだと中原が言っていた。」

鴨居が指摘した。中原は、過労が祟って、長期療養中の彼の同僚だ。その中原は、少しなら、お祓いも出来た。

「まあね。」

マスターはふふっと笑って、それだけ答えた。鴨居も世間話のような感覚で話しているので、会話を切り上げて、立ち上がる。マスターと美夜に見送られて、帰っていった。

現場に向かった明月たちは・ ・ ・ ・ ・。

夕景の赤い空がすでに半分、にび色に変わり始めている。冬の日は傾くのも早く、それを意識したと思ったらすぐに、あたりは真っ暗になってしまった。

日が暮れてすぐの、薄暗がり、くだんの家を不気味に包み込んでいた。

車を少し離れたところに置いて、ここまでやって来た三人と、向こうから走って来た子供の数人がすれ違う。子供たちは、わあっと歓声をあげて行く。楽しげだなと、すれ違った三人は同時に思う。遊びの帰りか、塾の帰りか、どちらにしてもこの辺りの子だろう。遅くなったので、家路を急いでいるように見える。知らず目を細める。これまでの緊張が解かれる光景だ。

けれども、耳に飛び込んで来る会話。えっと、聞きとがめる。

「早く。早く。ここを通りすぎなきゃ！」

「怖い。怖い。ここ、魔女の館なんだぜ！」

明月が子供たちを呼び止めた。

「魔女の館って、何かな？」

「うん。ここ、変なもの音がしたり、誰もいないのに夜中に笑い声とかするんだって・ ・ ・ 。」

「灯りのようなものが飛んでたりするって。」

おいおい、それじゃただの幽霊屋敷でいいんじゃないかよ・ ・ ・ と、明月は心の中で突っ込む。一人の子が得意そうな顔で、どこから聞きかじってきたのか、とっておきの情報を披露する。

「長い髪で、黒いドレス・ ・ ・ えっと、ゴスロリ？みたいな女の人が、蠟燭を持ってこの家の二階に立っていったって、うちの兄ちゃんの友達か塾の帰りに見たって。」

ゴスロリ・ ・ ・ 今、ものすごい映像が浮かんだぞ。苦笑しつつ、明月はここから見える二階の窓を指さした。

「二階って、あの辺の部屋かな？」

「うん？わからない。」

「その子は、この通りを通っていたんだよね？ここから、よく見えるのはあの辺りだと思うんだけど・ ・ ・ 。」

「じゃあ。そうかも。」

他の部屋の窓は、通りからは庭木の陰になったりして、窓に立っている人の様子がはっきりとそれとわかるほど、見えない。子供の情報なのでどこまで、信用出来るかわからないが・ ・ ・ ・ ・。

「ああ。じゃあ、そういう格好したお姉さんがたまたま、お家を見にきていたんじゃないかなあ。ここ、売り家だろう？」

明月の言葉に、子供がぷっと頬を膨らませる。

「違わい。こっちをその女の人が見てにやって、笑ったって。ふっと、蠟燭の火が消えて、真っ暗になったから、よく目を凝らして見てみたら誰もいなかったって。それに、あそこは前からお化け屋敷って有名だったんだ。」

「そっか、だから魔女も住みついたんだね。」

話を聞いていた他の子が納得している。小学校低学年くらいの子たちだから、空想のような内容にも理解を示すのか……。今の情報が溢れた社会に育つ子たちが、そんなメルヘンチックな設定を現実にあるものと信じ込むか？あるいは、それを裏付けるほど、幽霊屋敷として有名だったのだろうか。

子供たちと別れて、先に近所の人を捕まえて、聞いてみる。彼らには、この家を買おうかと思って、こっそり下見に来て、評判を聞いて回っているのだと言う。

一様に同じような反応がかえって来た。え？あの家？やめとき、あかんあかん……。というような始まりで、身振り手振りで自分の体験談を話し出すのだ。

誰もいない家から、騒音が聞こえたり、家鳴りが外まで聞こえるという。

「そら、空家は物騒やさかい。誰か、入居しはったらええねんけど……。」

黙っているのは良心が咎めるほどなのか……。と、明月と辻は顔を見合わせた。野々宮の顔が青ざめている。その人を最後に、聞き込みを止め、目的の怪談屋敷まで戻ってくる。

玄関ポーチで、立ち止まって、明月は下に落ちていた葉っぱのようなものを拾う。

葉っぱは、はらりと落ちたというより、繋がっていたものから弾けて千切れて飛んだというような切り目をしている。もう少し探ると、木の蔓の破片のようなものも見つかった。

爆弾ではじけ飛んだような、そんな欠片だ。

明月は、覗きこんでいる辻と野々宮にそれを見せた。

「野々宮さんが、最初にこの家の怪を目撃した時、クリスマスリースを見つけられたんですけどっけ？」

「ええ。」

たぶんこれがそのなれの果てだろう。

「これが、何か？撤去されたとき、千切れたんじゃないですか？」

辻が訊く。

明月の返事はない。彼はドアの前に立ち、中を透かして見るように目を眇めて、しばし無言でいた。何か考えているのかと思い、辻も野々宮も、じっと待っている。やがて、ふうっと、大きく息を吐くと、明月が振り返る。

「これは、この家の怪に耐えられなくて壊れたものだ。美夜の符と同じ。」

明月には、さっきから気になっていることがある。確信がないが……。

「野々宮さん。ここの家は施錠は頑丈なの？」

「いや。セキュリティって意味でなら、あまり万全じゃない。庭をまわっていけば、庭から出入り出来るガラス窓もあるし、古いから、裏口も簡単に開くよ。おそらく。」

ガラス窓も、隙間にかんして針金をいれて、ロックを下げれば開く。それを防止するボタンはついていない。

「ひょっとして、やはり人が入っているのか？」

何の目的でこんなお化け屋敷に……。自分が体験したあの怪現象は、人の手で作られたものではない。悪戯するにしても、ここに入るには勇気がある。野々宮は、眉を寄せた。

「いる・・・かも。」

明月は、野々宮と辻にここにいてくれと、言い残して、庭を回って居間の方に回って行く。

敷石が庭に小道を造っている。周りに植えられた芝生は、冬なので枯れていたが、所々、小さな草花が似合うような花壇が配置されていて、真ん中に石組みの池がある。その池の石組みの淵に座って、春になれば、滴るような緑と花のあふれる美しい景色を望めば、外国の古い屋敷の庭に迷い込んだような気持ちになるだろう。今は、冬なので、その美は抑え気味だが、それでも、十分異国情緒あふれる庭だ。京都の和的な空間を目にする機会の多い明月にとって、どこか、知らないところへふらりと迷い込んだような錯覚を覚える景色。明月は、庭から、二階の窓を見上げた。

「・・・・。」

二階の窓に、蝋燭の灯りが頼りなく映っている。それが、あちこちの窓を行ったり来たり、ゆらゆらゆれて、やがて階下のこの庭とつながる大きな窓に寄ってくる。

人影が浮かび上がった。

月の光も照らし出す。人影の輪郭が露わになる。くるくると緩くカールした長い髪。ひらひらがついた、今時、こんなワンピースの女・・・。まっ黒だ。薄い光沢のある生地。袖が膨らんで、袖にも身頃にも細部にあちこち同系色の黒で繊細なひらひらの飾りがついてる。スカートは長めだが、Aラインの広がった裾からペチコートの子レースが何十にも重なって見えてる。編み上げのブーツ。・・・・なるほど、ゴスロリ。まるで、アニメのキャラクターのような存在感だ。

明月がじっと見ている。向うも、気付いた。明月の視線を受け止めて、黒い瞳が一度大きく見開かれる。その瞳が笑った。まるで、知り合いにあったかのように・・・・。

くるりと背を向けて、廊下へ家の内部へ去ろうとする。

生きた人間だ・・・・。何のためにここにいるのか、確かめる。明月は、走り出した。出入りできるガラス窓は、薄く開いている。明月はそこを開けて進入する時、瞬時躊躇した。

ほんの少し中の空間に違和感を感じる。迷っていたのは、ほんの数秒だ。

「おい！待て！」

入ってしまったから、やはりと思う。この微妙な怪屋敷の中をあちこち繋がる道が存在している。明月は、ゴスロリ女の持つ灯りを見失わないように追っていく。数センチずれただけで、全く違うところに出てしまう、道がいくつも存在する。

一階にいた筈の明月は、二階にいたり、裏口のところに立っていたり・・・・家の間取りを無視して、矛盾に満ちた追いかけてこた。

ゆらゆらと蝋燭の灯りが、おいでおいでしている。待っているのか・・・・。一定の距離をあけて、前をゆく女。

「どういふつもりで、こんなことをしているんだ！待て。」

「はい。」

待てと言われて、その女が立ち止まった。緩くカールしてる長い髪がふわりと揺れて、彼女が振り向く。

「見つかったから、終りね。」

「こんなことして・・・人様の家の中に勝手に変な空間をつなげやがって、良いと思ってるのか？」

明月が詰問する。彼女は、悪びれるふうでもなく、一指し指をなぜか、壁のほうへ向け、それから手に持っている蝋燭の灯りを銀の小皿の燭台ごと床に置いた。

「ここ、危ないから、夜間は入らないほうがいいかも・・・。迷ったら手を貸してあげてもいいかなって思ったけれど、必要なかったわね。あなたなら、自力で出られる。じゃあ、そういうことで、さよなら。」

「おいっ。」

捉えようと手を伸ばす明月をかわし、するりとまた怪しげな道を通って消えてしまった。

「ちっ。なんだあいつ。」

つぶやき、置いて行かれた灯りを拾う。拾って、ぐるりとその部屋を見回す。

ここは・・・北側の隅の部屋だ。軽い驚きとともに、明月はじっくりともう一度丹念に部屋の中をみまわし、一点を見つめる。さっき、あいつが指さしたところだ。明月は注意深く壁に近付く。付近に破れた符の落ちているのを見つける。

「ここか・・・。」

こんこんと壁を叩いてみた。砕いてみようと思ったが、まわりを閉ざす微妙な状態を思い出し、あきらめる。仕切りなおしか・・・。明月は外へ出るために、またもとの道に戻って行く。外の庭へ出た時には、軽い疲労を覚えていた。

明月が表へまわって、戻る。待っている辻と野々宮が、いっせいにどうだったかと訊く。

「段取りの目途は立ちました。明日は、他の仕事が入っているので明後日でいいですか？」

「ああ。なんとか、時間を空けるよ。」

野々宮が答える。

あらためて仕切りなおしということで、その家を後にした。

朝まだき、庭の苔の湿ったような緑の匂いがしている。瓦屋根の下、木造の古い建物。畳敷きの部屋がいくつもある。回遊式の廊下を渡って行くと、小さな坪庭が、いくつが存在し、それぞれの部屋は心地よく隔てられていた。いくつも建物が折り重なって出来ているようには見えるが、敷地自体は小さい。坪庭のお陰で個々の部屋が独立を保っているように思えるからだ。

まだ、辺りは暗い。お寺の中。線香の匂いが漂っていた。

「・・・なるほど、それは気の毒にねえ。」

明月は、椿の木と緑の苔の広がる坪庭の見える部屋に、座っている。卓があり、茶が入った湯のみがふたつ、置かれている。明月のとなりには、辻。あくびをかみ殺して、明月たちの話を聞いて、眠気に耐えている。彼らは、夜中の二時に起きて、ここにいる。早起きというにもほどがある。明月さん、よくもつよなあ・・・と、辻は、それでも、まったく堪えてなさそうな彼のほうをちらり。また、欠伸が出てきそうになったので、卓の向うの方を辻は見る。一気に急冷凍、背筋が寒くなるのを感じた。

「でしょ。もう、私、悔しくて悔しくて・・・。」

ずずっ。明月が湯のみのお茶を飲み干す音。話しているのは、頭から血を流して、青白い不健康そうな女性。彼女は、二股かけられて、結局ふられたその日に、交通事故に遭って亡くなったのだそうだ。・・・それは、気の毒なのだが、なんだか、ただの悩み相談室の様相を呈している。幽霊を相手に、人生相談なんて、滑稽な・・・辻は、思っていた。この女性で、何人目だろう・・・。午前二時から、ここに座って、色々な霊が列をなして、明月に恨みや心残りや告げていく。明月は、うんうんと聞きながら、相手を否定することなく、一言、二言、答えていって、最後には、なぜか、霊たちが納得して消えて行った。

列は、この女性で最後のようだ。

顔に青筋のような影のある表情の女性を、明月が正面から見据えて、口を開く。

「けれど、君は本当は、もうそんなこと、どうでもよくなりかけているでしょ？」

「え？」

「ここには、どうして流れて来たの？亡くなった場所でもないし、君にとってこの寺は、縁も縁もないところでしょ。」

「ええ。そう・・・お線香の匂いの染み付いた人について来て・・・。」

「お線香の匂い、どう思った？」

「あの・・・良い匂いだから・・・。」

「邪悪なものは、この匂い、避けるものなんだ・・・。」

明月が後ろの床の間に置いてある香炉にちょっと手を伸ばし、その上を仰ぐようにして、香炉の香りをふわりと、その女性の方へ押しやる。

その女性は、明月の意図が分からなくて戸惑っている。

じっと射る様な視線を投げかけてくるその瞳に、たじろぎながら息を詰めている感じ。実際には、息はしていないのだが・・・。

「君はね。成仏したがつているんだよ。だから、線香の匂いに惹かれてやって来た。悔しいとは言ったけれど、君は、その恨みを直接相手にぶつけることもなかったし、今ここで、もういいやって、思い切っちゃえば、ちゃんと浄土へ行けるよ。」

「……………」

その女性は、目を見張る。

「因果応報……。自分のなしてきた事は結局は自分に帰る。その相手の男、どっちみち碌なことにならないさ。余所見する癖のある奴は、又、同じこと繰り返すよ。誰かを泣かせているうちに、そいつの運も破綻するように出来てる。だから、もう、その男のことは忘れてしまったほうがいい。」

「え……？」

「君が流した涙……。いつか、どこかで彼にしっぺ返しがかかるはずだ。けれど、これ以上恨みを募らせて、呪うようなことになったら、君自身の魂を汚してしまう。因果応報。自分のなしてきたことは自分に帰るって、さっき言ったでしょう？」

ごくり。あつたら、唾を飲み込みそうな雰囲気だ。明月がにやりと笑う。

「嫌な奴に巻き込まれて、これ以上、君が不幸になることはない。……だろう？」

ごくり、幽霊が頷いた。頭から流していたはずの血が消えて、生前のきれいな笑顔が戻る。ぱっと、明るい顔になり、ゆっくりと煙のように消えて往った。

ふう……。見届けた辻が、肩から力を抜いて脱力。いつもながら、ほとんど言いくるめているような技だ。ほっとしていた。

「あのう……………」

うわっ。まだ、残っていた。辻は、驚き、慌てて居住まいを正す。明月は、まだ、残っていることに気付いていたようだ。それほど、驚いていない。ただ、ほんのちょっと、目をしばたたかせ、この部屋より奥の別の部屋をちらりと見たのが、辻には気になったけれども、明月がすぐにこれまでどおりの話を聞くスタイルで進めていくので、問う間もない。

相談者は、古式ゆかしい幽霊だった。

暫バラ髪に、恨めしそうないかにも暗い顔。身につけている甲冑は、ぼろぼろ……。落ち武者という言葉がぴったりだ。武士の姿をしていた。槍が何本も体に刺さっている。事情はわからないが、合戦で斃れた者だろう。

どこかで、見たことがあるような……。辻が、首をひねっているうちに、明月はどんどん話を進めていく。はっとするともう、その武士の幽霊は、涙を流しているのが辻の目に映った。武士は、妙にさっぱりした顔をしている。

「……さっきの話を聞いていて、成仏したくなかった。輝くような笑顔を残して去って行く者たちを見て、どうにも羨ましくなつてな……。」

明月が頷く。

「そうだねえ。いつまでも、そのままでいても、つらいだけだし……。そこは、暗くて、じめじめしてるだろう？」

まるで、目の前にいるのに遠くの人と電話で話しているようだ。明月の視線が相手と焦点を合



わすように、じっと一点を探してしばらく彷徨う。

「さっきの話を聞いていたなら、わかると思うが……。今、こうなってしまった原因は、自分にもあると、反省する気はあるかい？」

いきなり明月の視線の焦点が合い。ばちっと、それこそ電流が弾かれた音が聞こえそうな、瞬間。緊張が走る。ごつい、豪胆そうな武士が、射すくめられて、思わずたじろぐ。

「……………」

冷汗というものが出るなら、出ていただろう。その瞬間の表情を捉えて、明月がふっと呼吸を静かにはきだし緊張を解いて、追及を緩める。

「じゃあねえ。思い出すと、心が温かくなるような思い出を浮かべてみて。」

「温かくなる……？」

「ないの？生きていた間、ひとつも良い思い出はなかったの？」

「羽振りがよくて、ぱっと金を使って、綺麗どころに囲まれていた時とか……。」

「……う～ん。まあ、良い思い出はしたのかもしれないけど、違うなあ。欲に直結するようなのはだめです。それだと、あんまり好い所へ往けないかもしれないからね。」

「さて……言われている意図が解せぬが、もう少し純粋な心で、という意味か？では、童子の頃かのお……。」

「……なるほど、子供時分のね……じゃあ、それ思い出浮かべて、心の中が温かくなるかい？」

「うむ……。」

心の中に、温かい思い出が浮かんだようだ。無念の形相が変る。

だが、そのあと、何も変化が起きない。ぽやんと、楽しそうな顔になっていた武士が突然、困ったような表情を浮かべる。

「どうした？」

「……いや、親兄弟や、親しい者の顔が浮かんで……。」

「うん……？」

「わしが、斃した者達にもそんな思い出があったのだろうか……。」

「さあ。あんたの生きた時代なら、子供のころから、天涯孤独もあると思うけれど、それでも、彼らが亡くなって悲しむ人の一人や二人いたかもしれないね。」

「……………」

武士は暗い表情をしている。けれども、その顔は無念の表情ではなくて、後悔の念が浮かんでいた。

「もう、恨みの気持ちは手離せるね。」

「ああ。己の不覚悟の故だ。少なくとも、このような目に遭って、それを恨む資格はわたしにはない。」

武士が頷く。体に沢山刺さっていた槍が消えた。同時に、あたりが明るくなり、すうっと、その姿が解けるように消えていった。

見送ったあと、明月ががくっと脱力。後ろに手をつけて、体が斜めに傾いで、顔は上を向いて

いる。はああっ・・・と、大きく息を吐いてぼうっとしている。

「・・・復讐かもな・・・。」

何百年もああして、成仏出来なくて己の情けない姿を晒していた武士は、もう解放されてもいいだろうと明月は思う。この世に繋ぎとめられていたのは、ある種、あの男に向けられた復讐の念ともいえる。

「え？」

明月のつぶやきが聞き取れずそばにいた辻は、聞き返す。

「・・・さっきの奴。寂しい人生だよなあ・・・。」

「槍が何本も突き刺さってましたし、哀れな末路ってことですか？」

明月が首を横に振る。生きた時代が違うし、比較出来るものなのかどうかわからなかったが、武士が亡くなるまでの決して短くはない人生のなかで、本能が先行するだけの、殺伐とした世界でただ生きていただけなのかと、想像していたのだ。

「結構いい年のおやじみたいだったし、あの年で、子供の頃しかいい思い出がないなんてなあ。心の温まるような、もしくは気の晴れるような話とか、期待して言ったんだが・・・。」

「子供の頃では、駄目ですか？」

「悪かないさ。悪かないけど・・・。なんだかなあ・・・。」

「たまたま、思い浮かばなかっただけじゃないですか・・・？」

「・・・そうだな。どっちみち、死んでる奴のこと、あれこれ言っても仕方ないか。」

話を聞きながら、辻は部屋の傍らに置いてあったポットから、急須に湯を注ぐ。明月に茶を淹れてやる。

こぼこぼ・・・。湯のみに茶を注ぐ音に気付き、明月が辻に礼を言った。

「なんだか、人生相談のようでしたね・・・。」

辻の感想。はああと、明月が溜息をつく。

「本業で、あんだけ、客がくればなあ・・・。こんなバイト続けなくていいんだが。結構、この仕事、疲れるんだ・・・。」

「あはは・・・辞められると、困りますけど。本当重労働ですよ。危険だし。」

ずず・・・。茶を啜りながら、一息つくと、夜が明けて来た。お寺の朝のお勤めの読経の音が流れてくる。辻が終了しましたと、告げに行き、寺の人に見送られて、帰って行く。

冬の朝の空気は、乳白色にけむり、冷たく、睡眠不足の二人にはちょうど眠気覚ましに適していた。腹が減ったので、早朝から開いているその辺の喫茶店で、朝ごはんを食った。

辻は、出勤時間が早いので、しばらくそこで休憩したあと、適当な時間に先に店を出て行く。明月は、11時に間に合えばいいので、10時ごろまで、そこでしっかり休んでから、出勤するため、移動する。

四条通りを歩いて、河原町の交差点に差し掛かったところだった。赤いコートの女が眼に入る。あの女だ。明月は立ち止まり、彼女の行く先を目で追う。三条方面へ向かって歩いていく。交差点の信号は赤で、渡れない。明月は西側。その女は東側。明月は、並行するように西側の通りを行き追って行く。最初の信号が青に変わったので、渡って行き、その女に追いついた。

「おい。待て。」

呼ばれて、怪訝そうな顔が振り返る。緩くカールした髪をきょうは、三つ編みにしているが、昨日のゴスロリ女に間違いなかった。

「あら・・・。」

「訊きたいことがあるんだ。」

「いいですけど・・・ここでは、ちょっと・・・。」

彼女は、すれ違っていく人が視線を向けていくのを目で示す。いつもは、人出が多く通行さえも困難になるほどなこの歩道も、平日のこの時間は、まだ人通りもまばらだ。二人が、立ち止まっても、さすがに、通行を妨げることはなかった。若い男女が立ち止まって、ちょっと剣呑な雰囲気醸し出しているの、痴話げんかか・・・と、暇な人が横目で見ていく。・・・だけでは、あるが・・・。

う～ん。往来で話すようなことじゃないか・・・と、明月はそこでの、追求を諦める。この時間は、落ち着いて話せる店は少なく、仕方なく、職場の方に誘った。占いの館って、聞いて、逃げられるかと思いきや、その女は素直に付いて来た。

並んで歩きながら、明月がちらりと確認すると、興味津々といった顔がにっこり笑う。変な女。思っていると、その女は、視線をじっと斜め前のお店に向けている。通り過ぎようとした時、とうとう立ち止まった。

ハーゲンダッツ。店の表のメニューの載った看板を見ている。

店の自動ドアがスーッと開いて、彼女が中に入る。明月もつられて入る。ドアが、また、スーッと開いて出てきた時には、ラムレーズンとチョコののったワッフルコーンが、その女の手に握られていた。

「おごって下さってありがとう。」

「いいけど・・・寒くないの？」

「？」

こいつ、本当に人間だよなあ・・・と、明月。それは、確かだ。けれど、どこか、浮世離れしているような・・・。どことなくふわんと心もとない表情なのだ。明月の視線を感じてか、女が首を傾げる。にこにこ笑顔が返って来た。ん？このパターン・・・なんか、まずったかも。女の雰囲気に、心と自分の式神うさぎの姿が頭に浮かぶ。明月はあさっての方向を向く。

「その・・・名前はなんていうの？」

不便なので聞いてみたが、内心聞かないほうがいいかもと、明月。

「名前？訊くの？」

悪戯な表情が返って来る。

「え・・・？」

「莉々で、いいわ。」

「リリィ？え？お水のお姉さんなの・・・。」

「違うわ。漢字。ジャスミンの方の莉よ。」

ちょっと、むっとした莉々が勢いよく言い返す。言ってしまった瞬間、彼女は微妙に顔をしか

めた。明月は、それを見て、おやと、思う。名は、その者を顕し、同時に縛ることも出来るので、多くの人に知られてはいけない。古くは、真名と言われる、親か、配偶者ぐらいにしか知らない名が存在した。悪用することも出来たから、そんな理由で、彼女が同じ術者なら、本名はなるべく隠すはずなのは、わかっていたが……。今の反応で、明月は想像がついてしまった。おいおい……。どうせ、隠すなら、関連のない名にしろよ。案外にもろく本心を露呈してしまう。彼女のふわふわした表情は別に、韜晦にさらばっくれているわけではないらしい。

「ふうん。もしかして……………」

「……………！どうして……………」

明月は、昨日の煙に巻かれた気分をやり返してやるつもりで、莉々の耳に本当の名を囁いた。莉々が目を見開く。

「相手が術者の場合は、すかした顔で、リリィ？そうね。それでも、いいわってくらい、落ち着いてるよ。……って、ごめん。口外も、悪用もしません。」

莉々が、困り果てたような顔をしているので、さすがに、明月も謝る。

「そうね……お願いするわ……………」

溜息とともに、莉々は、もとのどことなく、ふわふわした表情に戻る。気まずい沈黙が流れたが、幸いすぐに、占いの館についた。

中は、色んな占い師たちがいるが、互いの間には薄くても壁があるので、落ち着いて話が出る。明月のところは、ほとんど訪ねる人もいないので、休憩中とか、札も出す必要もない。ととと、必要なことを聞き出すぞと、明月は、莉々に質問を重ねていく。

莉々は、あの家の佇まいが気に入って、入り込んでいたのだという。クリスマスの飾りやなんかは、微妙なあの家の状態がこれ以上悪くならないようにと施しておいた彼女の仕掛けだった。だが、何度やっても2日ともたない。放っておいても、大丈夫そうではあったが、かといって長く放っておいてもいいのかわからない。それで、時間が空いているとき、来ていた。あの、指差した場所に、仕掛けがあって、おそらく、それがあの家の元の持ち主に向けられたものだろう。おかげで、別の沢山の霊を呼びこんだのだろうか……………。

「丑三つ時になると、哀しげな女の人の姿が浮かびあがるの……………。それ以外の時間は、沈黙しているわ。」

息もきれぎれで、哀れな姿であるという。莉々の言葉に、明月が眉を寄せる。……………丑三つ時。真夜中に、女が一人あの家に入出入りしていた？本当に魔女かも……………。と、思いつつ、そこに至るまでの夜道の危険について、明月はついつい説教を始めてしまう。

莉々は、大人しく椅子に座っている。動かない。彼女はまじめに聞いているのだが、みじろぎひとつしないので、ある意味不安になって、明月が彼女の顔の前で手をちょいちょいと振る。すると、莉々の顔が笑顔になった。それまでの、どこを見ているのかわからない顔つきではない。きちんと、焦点があってる。……………。

話がそれていたのを元に戻し、明月がまた訊ねる。

「莉々。バイオリンも、君がやったの？」

「ええ。音につられて、ちょっと踊りだしちゃったけれど……………」

「じゃあ。あの道は？」

「あれは、もとからよ。」

「……………。本当？」

「本当よ。物件が安くなるの、待ってたんだから……………。あんなややこしいことするわけないじゃない。」

「ああ。それで、ちゃちゃっと、原因を取り除かなかったんだ。」

「……………ごめんなさい。」

というほどには、莉々は、反省していなさそうだが……………。莉々は、手に提げてきた紙袋の中身をごそごとやって、中から、小さなビニールの包みを取り出す。お茶の葉のようなものが入っている。もうひとつ、ハーブを使った小さな手のひらに乗るリースを出す。

「これ、冬の新作なの。体があったまるハーブティ。それと、これは魔よけ。」

莉々は、おわびのつもりなのか、机の上にそれを置き、くれると言った。ふわんと、ハーブのいい香りが鼻腔をくすぐる。……………？あの家にも、漂っていた香りだ。

「これ、あの家にも、同じ匂いがしていた。」

「ええ。リースも、そうだけど、私が持っていたキャンドルの香りもお揃いな。特にセージは、古くから魔を寄せ付けないものとして家の庭に植えられたりした物なの。……………ハーブは、魔法の必須アイテムだもの。色々、研究してるの。」

「魔女……………？じゃあ、あの壁の中身が怪しいと思っているのは、邪気を感じたからなのか。」

「壁の中身。厭魅の法のこと？」

むっと、口をへの字にした明月。

「……………おい。随分、古式ゆかしいものにも、詳しいじゃないか。あの、道の通り抜け方といい。」

「あ……………」

莉々は、悪戯が見つかった時のような顔。明月が剣呑な目で見る。

「君は、何者？」

「その……………実家がそういう家なの。でも、古臭くて、嫌。アロマとか、華やかできれいだしいじゃない？……………ちょっとした反抗なの。」

莉々が笑う。厳しい目を向けていた明月が視線をはずし、ふんと鼻をならす。

「どうして、その家に生まれただけで、家業をつがなきゃならない……………か。」

「そうね。ま、継ぐのは、兄だけど……………。いやでも、手伝わされるから、ふだんは、好きなことやってるの。」

「なるほど。」

明月は、莉々のくれたリースを手の上に乗せて、うらがえしたり斜めから見たり、じっくりと見ている。リースの輪に、こよった和紙のようなものが絡まっている。これはきっと符だ。なるほど、和洋折衷か……………。効くんかいな……………と、うなる。

莉々は、莉々で興味深そうにじっくりと、部屋を見回している。物を置くのが嫌いな明月は、テーブルと占いに使う道具の他は、ほとんど、飾りもなく、殺風景な部屋だ。隅の方に、もう一

つ小さなテーブルがあり、電気ポットが置いてある。そばに、カップめんがいくつか積んであった。あとは、手荷物のデイバッグ。

「ねえ。ここって、どっちかっていうと、遊びでやって来るところよね？女子高生とかが、多いんじゃないの？」

「ああ。」

「それで、こんな殺風景なの？四柱推命・・・は、ともかく。もうちょっと、怪しげな雰囲気あったほうが、お客さんくるんじゃない？」

「あほか。ぱぱっとオルガン弾き鳴らしいとか、色水が沢山おいてあったりとか、インチキくさいのは、主義じゃねえ。」

「何？オルガン鳴らす人がいるのね。見世物としては、小鳥におみくじを引かせるほうが、良心的な感じ。・・・そうじゃなくて、えっと。」

莉々が、小鳥のように小首を傾げて考えてる。まず、机の上を指し、筮竹、表を指差し、提灯、といった。

「？」

「だから、使わなくても、なんとなく、知らない人にも目で見て、東洋的な雰囲気の小物を置くの。算木とか、持ってるでしょう？」

「・・・・・・・・。」

ちょうど、表ががやがや騒がしくなってきた。女の子たちが、わいわい言っているのが聞こえる。

「ねえ。ハーブの香りしない？」

「あ、ほんと、アロマだけ。そんな、占いあるのかなあ？」

「おもしろそう。」

声に反応するように、その部屋の扉の代わりにカーテンがしゃっと開いた。女の子たちは、いきなり開いたカーテンにきゅんと、驚きながら、こちらを向く。莉々が、カーテンを開けたのだ。

「あら、ごめんなさい。びっくりしちゃったかしら。」

莉々が、女の子たちに詫びる。ちょうど、開けようと思っていたところと、彼女たちの通ると、同時だったのねと、言った。

「いえ。あの、ここの占い師さんですか？」

莉々の何を考えているのかわからない、どこことなく、ふわふわした表情は、独特の雰囲気を持っている。控えめに、微笑むと人形めいた感じで、場所が場所だけに、女の子たちの興味を惹いた。

「いいえ。ここの先生を訪ねてきたの。クリスマスのリースを差し上げたかったから。」

莉々は、中のテーブルにのってるリースを指差す。緑の小さなリースが、女の子たちの目に映る。

「きゃあ。かわいっ。さっきから、漂ってたのは、この匂いかあ。」

「今から、体の温まるハーブティを先生に淹れてあげようと思ってるのだけど、よかったら、あ

なたたちも飲んでいかない？外寒かったですでしょう？」

「ええっ、でもお・・・。」

女の子の反応に、莉々がやっと気付いたというふうに。

「あ、そうだった。ここ、私のお店じゃなかったんだ。先生ごめんなさい。ここで、営業をするところだったわ。」

莉々が、振り返って、明月に告げる。

「靈感商法とかで、訴えられたらこまるから、やめてね。莉々。」

苦笑しつつ、冗談めかして答える明月。

「莉々さんっていうのね。ハーブティって、茶店の人？」

「いいえ。ハーブのお店よ。紅茶の葉とかも、扱ってるわ。北山のほうにある魔女の店って名前の・・・よかったら、いらしてね。」

「ここの占い師さんと知り合いなんだね。占い見てもらいに来たわけじゃないんだ。」

「ええ。私用で会いに来ただけ。・・・あ、でも、気さくでいい先生だから、ちょっと軽い気持ちで見てもらうのもいいかもね。」

にっこり笑って答えた莉々が身動きするから、ふわんと、髪から、ハーブのいい香りが広がる。女の子たちが、ちょっと顔を見合わせる。

「なあ。今、見てもらったら、そのお茶飲める？」

「そうそう、北山まで、今からいくの遠いし。」

「うん。そうそう。」

女の子たちが言った。

「ええ。たぶん。・・・いいわよね。先生。」

はいはい・・・。明月が、おざなりに頷き、手招きする。

莉々が、手荷物から、ポットとティセットの入った箱を取り出し、ポットの湯を注いでお客の女の子たちに振舞う。

「じゃ、私はこれで、あとで器は回収しに来るから、置いておいて。」

ばいばいと、手を振って出ていく。

明月は、客がいるので、後を追うどころではなかった。

夕方。明月は、晩飯を利休庵で食べようと思って、店じまいして、外に出ようと建物の中を歩いていた。ふいに、掠めた香りに顔を顰める。莉々の残していったハーブの香り？

あいつ、あっちもこっちも、もの珍しげに、覗いてみて歩いて帰ったな……。あちこち、ぐるぐるとまわった形跡がある。明月が通り過ぎて来たところの中でも、ちょっと毛色の変った演出をする占いの店の前で、いくつか、微かに残り香があった。それにしても、こんなに長く残っているものなのか……。？彼女が、それほど強く香りをつけているようには思えなかったが。魔よけでもあると言っていたから、不思議な効力でも発揮しているのだろうか……。？また、立ち止まる。

ここは、幽斎の所だ。けれど、幽斎のところは、はやってはいるが、明月と同じ、ありきたりな占いである。足が止まる。

「やあ。明月君。」

幽斎が出てきた。

「こんにちは。幽斎さん、今日はもう、終わりですか？」

「うん。今日はなんだか、疲れてしまって……。」

幽斎が答える。明月が鼻をくんとさせ、瞳を泳がせたのを見て、幽斎が穏やかに頷きながら、中を指さした。あ……。リースだ。幽斎の机にのっている。明月が幽斎の方を見た。

「今朝、君が連れていた子だろう？あちこちの看板をおもしろそうに眺めていて、たまたま目があってしまってねえ。声をかけたら、そのハーブのリースをくれた。」

「……。何か、ご迷惑おかけしませんでしたか。」

明月が、恐縮する謂われはないのだが、ここまで連れてきてしまったのは確かだ。彼女独特のペースに、振り回される人もいるだろうと、思う。

「いや、そんなことはないよ。どんな所が集客力があるのか、興味があるみたいだった。彼女かい？いや、大人になった……。あの、けんかして道に転がっていた、やんちゃ坊主が、なあ。」

幽斎は目を細めた。明月は居心地の悪そうな、ばつの悪い表情をしている。疲れたと言っていたので、具合が悪いのかと話題を変えようと明月は訊いた。年寄りだからなと、返事が返ってきた。夕飯を一緒に食べに行くことになる。幽斎が中から、コートをとって来る。その時、明月の鼻をかすめたものがある。ふわんと、ハーブの……。しかしこれは、有り得ないことだ。仕舞われてあったコート。それに、香の煙を燻らしたように立ち昇った気配……。明月の頭に忘れていた記憶が浮かび上がった。昼と夜とを行ったり来たりしているような瞳を思い出す。幽斎と、明月と知り合いになった経緯……。明月がまだ、中坊の頃、それはそれはけんかばかりしていたのだ。ちょっとしたことで、きれてけんかすることなど、しょっちゅうだった。

あの日も、繁華街を歩いていて、やはり、つまらないことから、口論になり、けんかになった。結果は、明月の惨敗で、ずたぼろの状態、道に転がったままの彼を、幽斎が拾ってくれた。真夜中すぎ、人通りも少なくなっていたから、助けてくれる人などもいない。人が通ったとし



ても、あきらかに喧嘩かなにかで、ずたぼろの彼と、関わりあいになうのをおそれて、声をかけることを躊躇っただろう。ぼろぼろの状態でも、明月は、しっかり意識はあり、たんに起き上がるのが面倒になって、通りに転がっていただけなのだ。

ぽつんと、通りの端に、提灯の灯りが灯っており、白い布で覆われた机の向うに、幽斎は座っていた。提灯には、易と書かれていた。

「加減を知るやつでよかったな、ぼうず。」

幽斎が机の向うに座ったまま、ぽつりと呟く。明月は、通りの端に転がったまま、きっと睨みつける。幽斎は、それを軽く無視した。

しばらく沈黙がながれた。吐く息が白い。明月はぼんやりと動く気力もないまま、白い呼気があがっていくのを見ていた。すぐ傍に人の気配がして、そちらに目を向けると、幽斎が立っていた。湯気のたった素焼きの湯のみを手をしている。明月に差し出す。

あの時、どうして彼の差し出した湯のみを受け取ってしまったのか……。ただ、真っ白な髪と好々爺めいた雰囲気と相反して、その目は昏くて深い。日暮れと夜の間の、微妙な暗さ……。夜だけど、夜ではないような……。逢魔ヶ刻という言葉思い出す。まさか、魔物というわけではないだろうが、何となくつかかかるとも失せて、幽斎の差し出した湯のみを受け取ってしまった。明月が、茶を飲み干したあと、ぼそりと礼を呟くと、幽斎は眉を開いて、意外そうな目で見ると、それから、うんと頷く。

「どうやら、動けるようだな。ここに寝ころがっているのは商売の邪魔だ。どいてくれんか。私らには、その日の暮らしかかっているんだ。」

「・・・・・・・・・・。」

幽斎は、明月の反応を見ているようだ。心持ち首を傾げて、掬い上げるような視線だ。年寄りの説教か……。明月は思った。

「どこへも行くところがないなら、せめてその脇にでも座っていてくれんか。」

「え・・・・・・・・？」

てっきり、子供は早く家に帰れとか、どこか別の場所へ行けと言われるのかと、思っていた。「事情は人それぞれあるだろうさ。このまま追い払ったところで、どこかでまた転がってそのままぼっくり逝かれても、寝覚めが悪い。その辺におったら、様子がおかしければ、救急車を呼ぶことも出来る。・・・手あてがして欲しくなったら、言ってくれ。」

幽斎はもう、易と書かれた提灯ののった机の向うに座っている。明月は、のろのろと立ち上がり、その机の傍に行き、すぐ隣の地面にうずくまった。

膝を抱えて、ぼんやりと見ていた。こんな真夜中に、結構人がやってくる。幽斎は、さきほど、明月に見せた昏い目はしていない。かといって、明るい暖かな顔なのかと言えば違う。自分自身はほとんど出さず、ただ、相手の話を聞いてやるだけであった。合間、合間に、幽斎が言葉をはさみ、その度に相手の警戒が弛むのがわかった。

これは、どちらかといえば、カウンセリングのような……。占いなどでは、ないではないか。易なら、明月にも方法はわかる。さっきから、幽斎は、まったく占うそぶりもない。ようやく、相談主の気持ちがあぐれたところで、やっと幽斎が占いを始めた。

結果が出た。相談内容に合わせて、適当にごまかすのかと思っていたが、そのままを伝える。悪い結果の場合でもそうだった。ただ、そのあと、相談主の為を思う言葉が、掛けられ、彼らは皆、納得して、自分なりに答えを見つけて帰って行く。

手品を見せられているような気分だった。

最後に、少し影の薄い人がやって来た。明月は、あっと思って見ていたが、幽斎はそれに気付くこともなく、他の相談者と同じように接し、その人も納得して帰って行った。

「今の……。」

明月がぼそぼそ話す言葉に、幽斎が目を丸くした。幽霊を占ってやるのかという言葉に、幽斎が軽い驚きをもって、しばらく明月を見ていた。

「こんな時間だからなあ……そんなこともあるのかもな。長いことこの仕事をやってると、色んなことがあるものだよ。」

ははっと、幽斎は軽快に笑う。もうそろそろ、客足も途絶える頃だろうから、手あてをしてやろうと言った。

幽斎の荷物の中に、湿布薬がある。長く腰掛けていると、あちこち痛くなるので、色んな種類が取り揃えてあるのだそうだ。腫れているところに、湿布して、傷には、絆創膏を貼って手あてをする。手持ち無沙汰というか……黙っているのも悪い気がして、明月はとりあえず、気になったことを口にした。

「ぱぱっと、占って帰しちゃえばいいのに、随分長いこと話を聞いてあげるのですね。」

「占いに頼りたくなるからには、悩みがあるからだろう。それなりに、吐き出してしまわねば、結果を伝えてもそれをどうするかにも、迷いが生じる。……私は自分の占いにはもちろん自信を持っているが、その結果をどう受け止めて、今後どうするかは相談者次第。それによっては、また、行き先も変わってくると思う。結局は人生を切り開いていくのは自分だ。」

「じゃあ、占いなんかやめればいいのに……。」

「そうだな……。でも、そうすると、明日から、私は食べて行けなくなる。」

幽斎は、笑う。眉をひそめる明月。

「もうこんな爺さんだからなあ。他に出来ることもない……。まあほん少し関わった人たちの心のおもりを少しでも軽く出来たらなあと思ってやってるんだ。出来れば、良心的にやっていきたいんでね。」

「良心的に……その価値がないやつらでも？」

幽斎がおやっという顔をした。心の中の思いを露呈してしまっ、明月はしまったと口を押さえる。けれど、どのみち名前も知らない、どこの誰ともわからない間柄なのだと思い直して、体から力を抜く。どういう反応が返ってくるかわからないが、もう、いいやと明月の事情を伝える。さっきの質問の幽斎の答えを聞いてみたかったのだ。

「陰陽師って言葉知ってますか……？信じられないかもしれませんが……。」

明月がぼつりぼつり、語り始める。幽斎は始め少し、目を見張ったが、じっと話を聞いている。陰陽師という言葉は、古めかしいが、明月の生まれた家は、怨霊を祓ったり、呪いなど受けた人を助けたりすることを生業としてきた家系だ。といっても、安倍某とか賀茂何々とか有名な

家系とは違う。起源は全くはっきりしないがたまたま何代か霊能者が続いたため、家業として確立してしまった家なのだろう。それでも何代も続いている為、顧客も代々とか、紹介されたりとか、飛び込みではあまり依頼は来ない。それでも、十分やっていけるような家だ。けっこう法外な値段を惜しげもなく払う依頼主たちのなかには、どうにも、人間として好きになれない人物も多い。呪いを受けても当然だと、明月が思うような人物ばかりだ。はっきり言って、同情できるようなものは少ない。ずっとこんなことを続けて生きるのかと思うと、ぞっとする。

明月の話をしている幽斎は、笹竹を手で弄びながら、話の区切りがついたところで口を挟む。

「古い占いの起源には、陰陽道も関わっている。もちろん、言葉は知っているよ。こんな商売だから、未だにそういう家業も存在していることも……。信じるかと、聞かれれば、君はさっきこの世の者ではない相談者を見分けているからね。信じるよ。実を言うと、夜中に商売をしているせいか、これまでも少しばかりおかしい相談者も混じっているのは気付いていた。私にとっては、此処へ来て自分なりに答えを得て帰ってくればどちらでもいいがね……。当たる占いには、閃きというか、靈感のようなものは必要だから。うむ……。」

幽斎が、じっと明月を注視している。

「ぼうず。家業を継ぐのが嫌なら、継がないって言ってみたか？」

「え……そんなの、訊くまでもないじゃないですか？今も手伝わされてるんですから。」

明月の答えに、幽斎が苦笑した。

「いやはや、反抗出来る親がいるっていうのはうらやましいことだな。私は、幼い頃に二親を亡くしているから……。でも、ぼうずを見ていて、ひとつだけわかるよ。」

「？」

「ぼうずは、心の中に、人として駄目なものは駄目と、正と邪を分けられる物差しを持っている。荒れては見えるが、年寄りにまで乱暴をすることはなかった。」

「……………」

「ただ、無茶をするばかりでは結局なにも得られない。そればかりか、自分を傷つけるだけだというのは、わかるな？反抗する気力があるなら、一度正面きって、思っていることを親にぶつけてみるといい。」

明月はうんと言わず、黙りこんでいた。

「だめか……？さっきからのぼうずの言葉使い、最初の印象からすれば、存外穏やかで、丁寧なもの言い方も出来るから、きちんとした暖かい家庭で育ってきたんだと思っていたが……。」

「それは……………」

明月は、う～んと考えてしまった。言ってみるだけでも、言ってみるか、その時には思っていた。いつまでも、何にでもつかかっていることに飽きていたのかもしれない。

明月の心の動きを感じ取って、幽斎がさっきの質問の答えをくれた。

「良心に値しない奴ら……と言ったが、私は、たかが占いだから、別に放っておいても命に別状はないかもしれないが、悪い卦が出ていたら必ず伝えるね。それが、私の商売だから。ぼうずの

場合は、依頼主の命に関わるんじゃないか？」

目の前で死なれたら、気分が悪い……。明月は、ずるずると不満を抱えながらもやってきたことに、今更ながら気付き、同時にすとんと、腹に答えが納まる感じを味わった。

自分は、これからどうしたいのか、先のことを逃げずに考えて行かなければならないのだ。

「ぼうず。答えはでたか。」

「はい。」

「じゃあ。もう、家へ帰れ。」

「色々、ありがとうございました。」

「たまには、珍客も、いいさ。」

明月は、幽斎に礼を言って、その日は帰って行った。それから、時々、差し入れを持って、夜中にふらりと明月が幽斎のもとに現れた。そのまま、邪魔にならないように弟子のように傍に控え、幽斎と客のやりとりを見ていく。それも、だんだん、間遠になり、明月が随分久しぶりに、その場所を訪れた時、幽斎は姿を消した。

占いの館で再会した時は、互いに驚いたものだ。明月は、自分が占い師を目指すきっかけとなったこの幽斎を尊敬しているから、すなおに、再会を喜んでいる。

初めて見た時の、あの昏い目の印象……。それでも、それ一回きりで、そんな目をしているところを他に見たことはなく、忘れていたことだ。ふいに、記憶を呼び覚まされて、明月は動揺した。今まで、幽斎のまわりに、呪術的な雰囲気を感じたことはなかった。なかったのだが……。喉に刺さった小骨のようだ。疑いを完全に打ち消すことができないなんて。幽斎のコートからは、魔よけの香を燻らしたように立ち昇ったあの気配も、今は消えている。

明月は、食後の珈琲を飲みながら、湯気の向うに幽斎を見ている。結局、何も訊けないまま、幽斎が帰ることとなった。

からん、からん。お客が一人、早足で駆け込んできた。野々宮だ。彼は、マスターがレジで幽斎のおあいそをしているところに声をかける。

「明月さんでしたっけ、辻さんに訊いたら、夕飯はここで食べているかもしれないと言っていたから、来てみたんだがいるかい？」

マスターがにっこり笑いながら、奥を示す。ありがとうと、礼を言って、野々宮が明月の座っているテーブルの方に急いでいく。何事かという顔をしている明月に。

野々宮は、挨拶もそこそこに、話を始める。

「例の洋館の件ですが……。遺族の方に、直接話しを聞いてみました。やはり、持ち主は、何故か住みたがらなかったということで……。ですが、ぼそりと、身内同士でつぶやいた、あんな家欲しがらるから……。というのが、聞こえちゃいましてね。気になって、過去の名義の変更やら、なかったのか調べてみたんですが……。」

そこで、明月に話を遮られた。

「野々宮さん。ゆっくり話は伺いますから、とりあえず、座って、何か飲み物でも飲んで、落ち着いてからでいいですから……。」

明月が、入り口付近を気にしているのに気付き、野々宮は振り返る。店内に他の客がいて、会

計をしているのを見て、黙る。気まずい顔で、椅子に座った。

幽斎が出ていくのを見送って、明月と野々宮が同時に溜息をつく。マスターがもの問いたげにしている。けれども、野々宮の話が先だ。

野々宮の調べでは、物件は持ち主が建てたものではないということだった。元の持ち主は、遠い縁戚関係にある人だったということだが、どうも、騙し取ったようなかたちで、あの家を所有したらしい。元の持ち主は、もう随分昔に亡くなっている。

明月がう〜んと唸りながら、聞く。

「・・・亡くなったのは昭和30年になる前か・・・でも、怨霊ではないしな・・・。」

「え？祟りと違うんですか。」

「どうして、そう思われたのですか？」

反対に質問され、野々宮が躊躇しながら、答える。

「その・・・私が逃げ遅れた原因。ドアのところで立ち止まった時の・・・。声が聞こえた気がしたんです。あ・・・気のせいかもしれないんですがね。」

「どんな声？」

「ごめんなさいって・・・。女の・・・若くはない感じでした。」

聞きながら、明月の目がちょっと泳ぐ。女・・・。確か、丑三つ時の仕掛けもそうだったなど、考える。頷いて。

「なるほど。それで、下見にも付いて来たわけですね。出来れば、関わりたくないって顔してるのに不思議に思っていたんですよ。」

「あ、わかりますか・・・やっぱり。あんまり、悲しそうだったんで、気になって。」

「それにしても、怨霊にしたら、変ですよ。そのせりふ。」

「・・・・・・・・。」

明月は、マスターの方を向く。

「マスター。厭魅って、そんな長い期間効力があるものかなあ・・・？」

「さあ・・・長くかかることがあるとしても、入居して直後というからには、かなりの長期間だよ。大昔の政権争いならともかく、そんな長いこと術者が面倒みてくれるだろうか。呪いの依頼なんか受ける奴らなら、法外な値段だよ。」

「うん・・・。」

野々宮が、腑に落ちない顔をしている。

「あの、そんなに高いんですか？」

「そりゃあ、術者の命かかっているから・・・。かけたはいいが、呪いが跳ね返されることもあるからね。何ぼもらっても、俺なら嫌だよ。」

「へえ・・・ちなみに、相場はどのくらい？」

「そんなん訊いてどうするの。」

明月の口がむっとへの字になる。

「いやあ。税務署ですから、参考までに・・・。」

「言っとくけど、看板なんかあげちゃいない。そんな、裏街道に行く連中をどうやってみつける

のさ。」

「あ、そうか、宗教法人でわけでもないのか・・・。」

やれやれ・・・。脱線して、雰囲気がいっきに気の抜けたものになる。そこで、マスターが気がかりなことを訊ねる。幽斎のことだ。何者なのだと訊く。マスターは、彼を警戒していた。明月には、幽斎の私生活まではわからない。何者かと訊かれれば、占い師だとしか言えない。マスターが眉を寄せた。

「明月君、一体どういう知り合いだい？」

「・・・昔、けんかばっかしていた頃、世話になったことがあって・・・。俺が、今、占い師やってるのも、結局、あのとき影響を受けたからかな・・・。」

「ああ・・・なんか、急にまじめになったときのね。じゃあ、気にすることもないのかな。」

マスターは、その頃の明月のようすも知っているのだから、納得している。しかし、それにしても、明月がはぎれが悪いので、もう一度、注意深い目をむける。

「あの家に漂っていたハーブの香りが・・・。」

野々宮が目をまるくして口をはさむ。

「ハーブ・・・。それ、初めてあの家を訪れた時にもしていました。」

「うん。原因はわかっているんだけど・・・。」

と、明月は渋い顔をしている。莉々のことを話した。現場で不審な女を見て、今朝また、町中で出遭ったこと。彼女がくれたハーブのリースは魔よけであることや、なぜか、帰りに彼女が幽斎のところへ寄って同じ物を置いていったことなども、話す。

聞きながら、マスターが腕を組んでいる。

「莉々ちゃんなら、怪しい子じゃないよ。いや、行動は時々怪しいけど・・・。」

「マスターの知り合い？」

「美夜のね。どっからあんな良い人材を見つけてきたのか、時々、仕事をふってるみたいだ。この間、店にも来てくれて、ハーブティのサンプルをみやげがわりに置いて行った。」

ほらと、ハーブティの葉の入った袋を見せてくれた。莉々はしばらく外国へ行っていたのだ。ハーブのことを学びに、魔女修行とか言っていたが・・・。

「・・・なるほど、美夜はマスターの良い後継者だよ。」

明月がげんなりした顔で呟く。仲介屋をするための人脈を作る能力・・・。マスターの顔がうれしそうに輝く。・・・ったく、親ばか。心のなかの呟き・・・。

「なんだか、源氏物語のなかの一節を思い出すよね。」

マスターが、知識のない野々宮にも、分かりやすい例えをひいてきた。生霊と化して、源氏の君の正妻に崇る愛人の、六条の御息所の話だ。古典の授業などで、軽くあらすじなどを紹介するから、どこかで聞いた事があるはずだ。御息所は、源氏の恋人のひとり。いわゆる三角関係の感情のもつれというやつだ。御息所は源氏の正妻の葵の上が憎らしかった。実際には、その正妻と源氏の仲はうまくいっていないから、その妬みは筋違いにちかいものだが、その思いは生霊と化すほど強い念だ。葵の上の実家では、怨霊に苦しめられる葵の上のために、加持祈祷が行われ護摩が焚かれる。その怨霊を調伏する際の香の香りが、目覚めた時の御息所の袖から、髪から染み

付いたようにする。燻らした覚えのない香りに、自分が生霊とかしているのではないかと、自覚し始める場面。

魔よけの香りが、全く別の場所で漂っているなんて、象徴的な感じがする。

明月は、初めて幽斎に会った時見たあの目を思い出す。遭魔ヶ刻・・・完全な闇になる前の時刻。昼と夜との間を行ったり来たりしているような、揺れる印象。明月達のような仕事をする者のなかには、時々その種の間人がある。ふうっと、溜息をつきたくなった。これでは、ますます、疑がわしいではないか。

「幽斎さんなら、明日も、昼飯を食べに来るって言ってたよ。どうする、さぐりを入れてみてから、祓うかい。」

マスターの言葉。首を横に振る明月。

「方法は、別にさぐりをいれなくても変りません。それより、ここに引き止めておいてくれますか？」

「ああ。でも、もしそうだったら、彼に相当なダメージが帰ってくるよ。」

「・・・そうでないことを祈ります。」

マスターが頷いて、野々宮にやはり立ち会うのかと訊く。当然と言う彼に、マスターが提案をした。

「もしものことを考えて、莉々ちゃんに助っ人を頼んでもいいかい？」

マスターは何を危惧しているのか、そう言った。明月がこくと、頷く。明日の、予定を確認して、明月も野々宮も帰って行った。

翌日の午後。いつもは、ランチのお客がいるはずの利休庵には人っ子一人いない。

幽斎だけが、やって来た。……とても、顔色が悪い。マスターは、何くわぬ顔で、注文を聞いた。幽斎は具合が悪そうに、奥の中庭に面したテーブル席に行き、椅子に寄りかかるようにしている。食欲がないので、珈琲だけでいいと言った。

注文を聞いて、ゆっくりと珈琲を淹れ、幽斎のもとに運んでいくと、彼はマスターの顔を見上げ、にこりと穏やかな笑みを向けた。

「昔話を聞いてくれんか……。今日はもう、客は来ないだろう？」

「やはり……。」

「私もこの種の仕事をしなくなって長くなるから、この前は、気のせいかと思ったが、上手いもんだ、見事に結界が張られているね。」

「……。」

幽斎が頷き、店の隅のロッキングチェアの方を向く。ひとにらみすると、ふわっと、うさぎが姿を現す。

「おかしな気配がすると思ったら、式神じゃないか。あれは、あんたのかい？」

マスターが首を横に振る。

「では、明月君か……。ずいぶん古くて強い式神を使ってるんだな。これほどのやつを扱える人間なんてそうそういないだろう……。いくら、仲介屋のあんたのところでも、そんなにはいないだろう。」

「そうですね。あなたは、彼の実家のことをご存知でしたか？」

「いや。名は聞かなかったが、推量は出来る……。」

幽斎とマスターの会話を聞いていたうさぎが急に、耳をぴくぴくと動かす。ふわっと、宙に浮いていきなり姿を消した。呼ばれていったのだと、マスターは思う。幽斎は目を細めている。

「呼ばれて行ったか。もしかして、その先は……。」

くだんの洋館の場所を、幽斎は言い当てた。やっぱり、関わっていたのかと、マスターは溜息をつく。携帯をポケットから取り出し、中止を知らせようとボタンを押そうとする。すっと、幽斎の手が遮る。

「もう……遅いだろう。はじまっとる……」

「幽斎さんっ。」

ぐらりと傾いた幽斎。苦しそうに机につっぷして、それでも言葉を紡ぎ出す。

「……いいんだ……。どうなるかは、一度経験したことがあるから、分かっている。あの時は、命拾いしたが、今度は……。だから、息のあるうちに言っとく。これは、当然の報いなのだよ。」

術そのものは、大したものではない。たんなる嫌がらせに近いものだ。その頃にはもう、命を奪うような術には躊躇を覚えるようになっていたから……。けれど、高齢である。仕掛けた呪いが、返ってくれば、体がもたないかもしれない。言わずに、連絡を絶って野たれ死にしても



いいと思ったが、それでも、明月に後悔を残したくないから、ここまでやって来た。もちろん、自分が死んでしまったら、影を落とすことになるが……。ふとしたことから、知り合って、少なからず因果を含んでしまった。納得のいく形を残しておいたほうがいい。

幽斎はぜえぜえと喘ぐように、息をした。見かねて、マスターが背中をさする。

あの時、言えなかった本当の答え……。良心に値しない奴ら……。とは、幽斎自身も含まれるのだと。贖罪という意味でずっと、誰かのためになるようにとやって来た。他に生きていくすべをもたなかった……。昔、呪いを請け負って、命を殺めて来たことへの、消極的贖い……。だから、いつかこんな終わりが来ても、受け入れるのだと伝えたい。終わらせることを望んでいるのだ。やっと……。それを、明月に伝えて欲しい。ああ、そうか……。気持ちを受け取って欲しかったのだ……。今更ながら、幽斎は気付く。長く生きていても、彼にはそんなふうに思える人はいなかった。苦しい息の下で、自嘲の笑みが浮かぶ。幽斎が過去を語り始める……。

人生で一番最初の記憶とは、皆いくつぐらいのものなのか。幽斎は、幼少時の記憶はない。あたりまえに、家族に囲まれていたのか。それとも、捨てられてどこかで養われていたのか……。わからない。気がつくと、焼けた町の瓦礫を眺めながら、道端に座っていた。おそらく、十歳。おそらくというのは、わからないからだが、拾ってくれた人がそれくらいかと言っていたから、十歳。大きな戦争が終わって、町はまだくちゃくちゃで、幽斎のような子供はあちこちにいた。

ぼんやりと、青い光がすううっと立ち昇っては彷徨っているのを見ていた。何もわからなければ、夏の夜の蛍の飛び交う光景のようだ。道の真ん中をふらふらと怪我をした人が歩いていく。水、水と言いながら、顔半分が赤く染まっている。目だけがぎょろっと、黒く光っている。幽斎は、それと目を合わせないようにさりげなく、自分の気配を殺し、目を逸らした。関わってはいけない。それが、何か知っていた。

ふと、近付いてくる人に気付き、そちらを向く。

「ほう。あれが、見えるのか……。さりげなく、気配を消したな今。」

今度は、れっきとした人だ。さっきのは、死んでしまった人。幽斎がそれを見分けて、本能的に避けたのを指摘した。兵隊の格好をしていたから、復員して来たばかりの人だろうと思った。年は、そんなにいったない筈なのに、髪が真っ白だ。暗い瞳をしていた。

幽斎が身寄りもない、記憶も確かではない子供だと知ると、その人物はついてくるかと言った。幽斎はふらふらと立ち上がりついていった。その日から、彼を師と呼ぶ。師は、呪いを専門に行っていた。幽斎には、才能があつたらしい。月日もたたぬまに、易々と教えられるまま、習得していった。二年と少し……。師と呼んだ人と過ごした。その頃には、師の仕事のかわりも努めることが出来た。どこで、幼少時をすごしたか、普通の人にはあるべき記憶が欠けているせいだろうか。呪いを行うことに抵抗を感じず、その為知識がはいついていったのだろうか……。師とは日常、ほとんど会話することもなく、幽斎は黙々と与えられた仕事をこなしていた。それによって、人が死んでいくことなど、何とも思わず、手伝っていた。

ある日、例によって、呪いを引き受けたその最中、相手もそれを阻止する術者を雇い、放った呪いが跳ね返って来た。幽斎は意識を失った。気がつくと、師は隣りに倒れ、息をしていなかった

。大掛かりなものだったので、幽齋は手伝っていたのだが、師の死の原因は彼が主導で行っていたからなのか、それとも、幽齋をかばってくれたからなのかはわからない。少なくとも、日ごろの言動からは、弟子の命など顧みないかと、幽齋はその頃思っていた。次の日から、代わって幽齋が師の仕事を受け継いだ。

それも、しばらくの間だ。

やはり、呪詛を返されて、幽齋は気を失った。気がつくと、体も力が入らず、あんな状態でふらふらとよく外へ出られたものだと、今でも思うが、外へ出て、無意識にある場所を目指して歩いた。時々、師が亡くなる前、よく、通りかかった家。その家は、当時珍しい洋館であり、どこかの外国いるかのような庭。草花が咲き乱れ、したたるように光りにあふれた、夢のような光景だ。そこへ行く時だけは、幽齋にないはずの感情を呼び起こす。どうせなら、あれをもう一度見てから、斃れたいと思いつけ、辿りつく。目を閉じた。

幽齋が暖かい、柔らかい感触に目を開けると、ふとんに寝かされて、その家の中にいた。ちょうど、ようすを見に来たこの家の人、彼の気がついたのを見ると、ぱっと顔を綻ばせ喜ぶ。白い細面の顔。少しばかり、悲しげな表情の瞳。笑っても、どこか線の細い女性だ。この家の人だ。いつかの時に庭で見たことがある。ああ、この人だ・・・師が時々この家の近くで立ち止まって見ていたのは・・・。会いたかった人ではないか。直感した。

どうして、あんな所に倒れていたのかと聞かれ、上手くかわせなかった幽齋は、この場所を見知っていた経緯を話してしまった。

拾ってくれた人が、このすぐ傍によく立ち寄っていたと・・・。

「どうして、あの人は戻って来てくれなかったの・・・。」

やはり、関係のある人だったんだ・・・。幽齋が目を見張り、口ごもっていると、微かにその女性が微笑み、安心させるように頭を撫でてくれた。彼女が待っていた人は、戦争が本格的に始まる前、大陸へ渡り、一旗あげるといって、それっきり、行方が知れなくなっていた。彼女の家は、金持ちであり、そのままでは両親が許さなかったから、てっきり失敗して帰るのを躊躇っているのかと思っていた。

「もう、誰も反対する人なんか、いないのにね・・・。」

線香のにおい。家のどこかに仏間があり、毎日手向けられているのだろう。幽齋はそこまで漂ってきた香りに、彼女の他は誰もいない、この家の静けさを感じた。

「・・・一度だけ、訊ねたことがあるんです。どうして、声をかけないのかと・・・。声をかける、資格はないと。とても、暗い瞳をしていました。」

戦争から帰ってきて、変ってしまった人など、よく聞く話である。大陸で、何か大変な思いをして、帰国したのだと彼女は思ったようだ。繊細そうなその雰囲気。とても、受け止めきれそうにもないと、子供心にもそう思い、師と自分のやって来た仕事については、黙っていた。ただ、寝かされている場所がふわふわと暖かく、まだ少しそこにいたかったからかもしれない・・・。

。「・・・そう。私には、きっと大陸で大変だったんでしょね・・・。あなたも、まだ子供なのに、記憶を失くして、町角にいたなんて、かわいそうにね・・・。」

幽齋の手をぽんぽんとあやすように、握ってくれた。その彼女は、最期には、自分の傍まで帰ってきてくれていたのだと、涙をながしながら、自分に言い聞かせるように呟いている。

暖かい。手の感触に、ほっとしながら、幽齋は眠りにつく。再び目覚めた時、その女性は、彼を家においてくれた。急な病に倒れなければ、もしかしたら、彼を伴ってこの家に帰る機会があったかもしれないあの人が拾ってきた子だから、家族になりましょうと言って……。幽齋は、暖かい人の家というものを始めて知った。

以来、呪いの術は封印した。一人前になるまで、ほんの三年間ほどではあるが、その家で過ごす。それから、今のように占いをして、生計を立てた。師は、表向きは占い師をしていたので、そちらの知識もあったのだ。時々、その家に顔を出す毎日。ある日、幽齋にところに病院から電話がかかってきた。

あの家が、騙し取られてしまったのだ。度重なる不幸に耐えかねたのだろう。ショックで倒れて、幽齋が駆けつけたときには、うわごとを繰り返すばかりで、しばらくすると息を引き取った。

この人に恥じないように……と封じた呪いを一度だけ、封印を解いた。あの家に忍び込み、仕掛けをしたのだった。

昔話が、走馬灯のように、今、幽齋の頭に蘇る。けれども、すべてを語るには鮮やかすぎて、言葉がとぎれる。必要な部分をなるべく抜かないように、ぽつり、ぽつりと、断片的に話した。聞き終わって、マスターが頷く。

マスターは、幽齋の言葉から、その裏にある個人が経験したことの重みを想像して、溜息をつく。背中をさすってやりながら、片方の手でそっとエプロンのポケットをさぐり、中から人型の紙を取り出し、気付かれぬように、それに幽齋の息を吹きかける機会を伺った。目をつぶったところを見計らって、ふっと彼の息の前に紙を泳がせる。そっと、背中に貼り付ける。これで、どこまで防げるか自信はないが……。

「珈琲の思い出も、その人とのことだったんですね……。」

うっすらと目を開けた幽齋が、答える。

「帰ってこなかった待ち人の好物だそうだ。……おかしな話だが、暖かい幸せに浸ってしまえばよかったんだが、落ち着くと、自分のやって来たことの意味にさいなまれてなあ。奪ってきた命にはかえられんと思うが、ずっと贖罪の意味で助言を続けてきた。不幸なやつがわしのよう、間違っただ道をとらぬように……。人は気持ちしだいで、一線を踏みとどまることが出来ると、思うから。」

「……………」

幽齋さん、それではますます明月君が後悔する。悪いが、形代を身代わりにしてショックを和らげさせてもらいます。大事なうちのお祓いしを失くすわけにはいかないですからねと、心のなかでマスターが語りかける。

向うは、今、どうなっているだろうと、見えるわけでもないのに、マスターは宙に視線を彷徨わせる。

くだんの洋館では……。空間が見事に捻じ曲がっていた。色んな部屋の、光景が、着物の帯のように切り取られて、ぐるぐると広がっていた。

居間のガラス窓に近い位置に立ち、野々宮、辻、美夜、莉々たちがいる。美夜の結界の中にしたから、彼らのいる場所の周りだけ正常だ。

部屋の景色が描かれた帯が色々にとり散らかっているようだ。野々宮と辻が口をあけてみている。

「……何を迷っているのかしら。そろそろ、終わってもいい頃なのに。」

莉々がぼんやりつぶやく。

「明月さんが失敗したってことですか？」

辻が青ざめてききかえす。かわりに、美夜が口を開く。

「莉々、あんたなあ。こんな時に不安にさせるようなこと言わないで。」

「昨日伺った話。知り合いの人に術が跳ね返るってことで、迷っているのですか。」

「たぶん。……でも、引き受けたからには、投げ出すつもりはないと思います。」

野々宮が口をはさみ、美夜が答える。辻は、だいたいの事情を察した。

「でも、この状況。目がまわるなあ……。」

辻の言葉に、振り返った莉々が、ライターを持ってないかと聞く。辻は、煙草を吸わないから持っていないので首を振ると、横合いから、野々宮がさっと自分のライターを差し出す。

「こんな時に、たばこを吸うのか……。」

たぶんに棘を含んだ言い方なのは、この状況にいらついてきていたからだろう。野々宮の不機嫌そうなもの言いに、莉々は全く無反応で、ありがとだけ言って受け取る。

ポケットから、使いさしのキャンドルを出して火を点けた。足元に置く。

「この状況なら少し、もとに戻せるわ。香りが充満するまで待つて……。」

「莉々。方法があるなら、さっさと出しいな。」

美夜が呆れたように、叫ぶ。

「あら、結界のなかで皆大人しく待ってるつもりだったじゃない。どのみち、終わったら、元に戻るわ。これの効力は一定期間だけだから……。」

ああ、もう、はい、はい。と、美夜。辻と、野々宮がふたりのやりとりを面白そうに見ている。

莉々は、抱えて来たバイオリンケースから、バイオリンを出す。

そこへ、宙にふわりと、うさぎがいきなり現れた。

「伝言なのだ。莉々とやら……形代にする効力のある人形を持っていないかと、明月が聞いて来いと言った。」

「きゃあ。うさぎさんっ。かわいっ。」

莉々は、はしゃいだ声を出す。ふわふわで、とってもラブリーとか、式神うさぎには意味不明のことを叫んで、抱きしめようとする。

「う・・・何なのだこの人間。そ、それより、返事、はやくしろと言われているのだ。」

宙に浮いた状態で片方だけ、足をひっぱられ、逃げ腰で、うさぎが急かす。

「持っているわ。ほら。」

藁人形ですか・・・？うさぎも、その場にいた他の面子も凍りつく。よく見ると、藁で編まれているのではなく、生のハーブで形造られている。

「その体のところに、持ち物とか・・・本人の体の一部。爪とか。あ、髪の毛ぐらいがいいかしら？それを入れてあげると、りっぱな形代になるわ。時間がないなら、心臓付近に身につけて。」

何かの呪いみたい・・・。聞いていた他の面子は思う。莉々はうさぎへ形代にする人形を渡した。うさぎは、それを受け取ると、脱兎の如く、そうそうに退散していった。

見送って、莉々がバイオリンを弾き始める。

充満し始めた香りを追って、意識を集中するためなのだが、見ているだけのものには、音にあわせて、元に戻っていくように見えた。パズルが完成するように、散らばっていた帯が無くなり、だんだんすっきりした絵になり、最期に一枚の絵になる。もとの、リビングの風景になった。

ふうと、全員体から息を吐いた。ぴきっ。やっと、もとに戻ったと思った時、どこかで空気が凍り、それが割れるような音。その後、ずっと、静けさが流れた・・・。

美夜と莉々が顔を見合わせて、にっこりしている。

「終わったのですか？」

辻がほっとしたように聞いた。

足音がして、扉が開き、明月が姿を見せる。手のひらにまっぶたつに破れた折鶴が乗せられていた。皆のところに来たところまでは、確かに載っていた。

皆が注目する中で、それはさらさら・・・と砂のようになり、解けて風に吹かれたように舞い散り、消えていった。

きらきりと粒が舞い・・・輝きが言葉を蘇らせる。

「あ・・・。」

野々宮が、声をあげた。彼が聞いた女性の声。明月がしっと指を立て、静かにするように合図する。光りの粒に混じって、思い出が皆のところへ伝わってくる。

子供と女性の思い出・・・。子供といっても、小さな子ではないが。子供はおそらく、幽斎だろう。術を仕掛けた本人の思い出なのか、それとも、故人の思い出なのか・・・。呪いを封じ込めたものに、大事な思い出を封じるとも思えないから、おそらく、故人の残した思いのかけらなのではないか。粒は、きらめいては思い出を映し出し、ひとつ、またひとつ、と消えていく。

もう、ほとんど消えてしまった欠片を見ながら、自然とそんな考えが浮かび、最後にぱっと一際かがやくように、残っていた粒が集まり、花火のように飛び散り、残りの遺志を皆に聞かせた。

ごめんなさい・・・。と聞こえる。野々宮の聞いた声。

「あなたに、帰る場所を失くさせて・・・悲しい思いをさせて、か。」

もう、もとの静けさに戻った室内に明月の言葉が響く。誰からともなく、溜息が漏れる。

野々宮が明月の方を見る。

「あれは、思い出ですかね……。故人は、おそらく幽斎さんの存在に救われていたのではないのでしょうか……。」

「？」

「それが、子供だったこともあるだろうけれど……待っていた人と繋がりがある彼と、過ごすことで、成就しなかった願いの形を手に入れたんじゃないですか……。寂しさをうめていた。

」

「……それじゃあ、最後の言葉を伝えた方がいいかもしれないな。」

「あの……幽斎さんは？」

心配そうに様子を伺う野々宮に、明月はおそらく大丈夫だろうと、呟く。明月も確信が持てない事柄なのだが。

「それじゃ、早く。利休庵に戻りましょう。」

辻が気をきかせて、皆を急かし、車に乗せる。

町中の利休庵まで、戻って来た……。

奥の中庭の見えるスペース。端に椅子をいくつか寄せてベッドのようにして、幽斎が横たわっている。息も浅く、顔色も白い。ぱっと見には、生きていいのかよく判らず、明月は入り口のところで身を硬くして、寄っていく。

傍にいたマスターが、微かに微笑んで頷いてみせたので、ほっと肩の力を抜く。

マスターの方が先に歩みより、幽斎が眠っているのでカウンターの席へ座るように、皆に勧める。マスターがカウンターの向うへ行き、冷えた体が温まるように、甘酒を出してくれた。

ふうふうと、しばらくは無言で甘酒を皆、飲んでいた。

マスターが、幽斎から聞いた話を明月に伝える。やがて明月が、ぽつり、ぽつりと、あの折鶴が砂と化し、舞い飛んだ思い出の欠片の話をした。

最後に残した故人の思い……。幽斎に伝えてやらなければならない。

「……ごめんなさいか。あとに残す幽斎さんのことが心配だったんだな。」

マスターが言う。野々宮が思い出を見たあと、救われていたのは故人も同じではないかと言ったこと。それ故にごめんなさいの後の言葉は、幽斎に向けられたものではないかという推量に対して感想を述べたのだ。

端っこにかけて、それまで大人しくしていた、莉々がふいに庭の方を向き、ちょいちょいと、明月の服のそでをひっぱる。気をとられて、明月がそちらを向くと、奥に寝かされた幽斎が目を開けて聞いていた。

起き上がろうとしているので、駆け寄って押し止めたが、きかないので、助け起こして座らせる。幽斎は椅子の背にもたれかかって力なく座っている。

「すまんかった……。明月君にも、マスターにも助けてもらったようだ。」

形代のことを言っているのだ。跳ね返ってきた術が軽減された。けれども、まだ、助かったことを受け止めかねているようだ。

「助かってよかった、じゃあなかったら、俺責任感じてこの仕事、辞めてたかも。」

「それは・返しの風が吹くのは覚悟のうえだ。当然の報いというものだよ。」

「いつもなら、そう思うんだけど……。武器をかざしている人間には、それが自分の上にも降りかかって来ることは当たり前の現象だ。相手もそのつもりだろうから、遠慮せず返してやれっていうのが、死んだじいさんの教えでした。俺もこの種の仕事を引き受ける時はそのつもりだけど、さすがに、事情を知っているとそうもいかない。」

明月はちょっと怒ったような顔をしている。幽斎がじっとその様子を見ている。

「あんな何十年も前のしかけ、しかも、誰も傷つかないやつですよ。それどころか、傷ついているのは、幽斎さんじゃないですか。もう、いいですよ。十分じゃないですか。それよか、こつこつ、やってきたことを続けてください。寿命が来るまで、あなた自身のこと大切にしなきゃ、また、罪がふえますよ。」

「……………」

いっきに言いたいことを言って、黙った。幽斎は、はとが豆鉄砲をくらったような顔をして、

驚いている。しばらく、言葉につかえていたが、やっと返事をした。

「……そうだな……うん。しばらく体を休めたら、また続けるよ……。」

ほっと、暖かい空気が流れ、明月の前に、コトツとカップが置かれる。美夜が珈琲を淹れて持ってきたのだ。辻や野々宮も、カウンターから成り行きを見ていて、彼女に入れてもらった珈琲を飲んでいる。莉々だけは、ロッキングチェアの傍に行き、カモミールティを飲んでいる。うさぎと、同じものを飲んでた。

「幽齋さんも、今、何か飲まれますか？あ、水のほうがいいかしら……。」

「いや……わしも珈琲を。出来れば、牛乳で半分割ったやつを。」

「あ、カフェオレですね。」

美夜は、手馴れたようすでささっとカフェオレを淹れて持ってきた。

「美味しい。」

幽齋は、マスターの方を見てにこりと頷く。マスターが、うれしそうにしている。気になっていたことを訊いた。

「幽齋さん。時々ポケットに入っているものを手で確認するようにしていましたけれど、何かは知っているんですか。」

訊かれて、幽齋は中のものを出した。折鶴。出したとたん空気にとけるようにゆっくりと消えて行った。

恩人の女性が亡くなる前、握っていた折鶴だ。折鶴はふたつあった。彼女が、仏壇に亡くなった人の位牌の代わりに飾っておいてあったのと、いつ織ったのかわからないが、新たにひとつ。新しい方を握りしめていた。幽齋はそれをずっと持っていた。仏壇のほうのは、最期の姿を映しとって、あの家に仕掛けた。

「……わしはまだ、生かされている……。」

ごめんなさい……とは、最期に見たその人の姿。聞き取り得なかったその後の言葉さえ含み、故人の気持ちを時を越えて受け取った。幽齋は、そっと目じりを袖で拭いた。

姿かたちだけを写し取っただけのつもりだったが、どうやら故人の思いの欠片も封じ込めてしまったようだ。

「詫びてももう、言葉は届かない……。」

あんな痛々しい姿を晒し続けたなんて、酷いことをしたものだ。幽齋は、かすれた声で呟く。これでは、まだまだ、あの世には、呼んでもらえそうもない、と。

「マスター。また、来てもいいかね……。」

「もちろん。お待ちしておりますよ。」

ずっとひとつ所にいたことがなく、人との縁を結んで来なかった。たまに、顔を見たくなったり、ゆっくり時間を過ごしたくなる場所をつくってみてもいいかもしれない。それが長い贖罪にずっと耐えていく力にもなるかもしれないと、幽齋は思い、明月にもマスターにも礼を言って帰って行った。

今、幽齋は、ゆっくりと休養をしている。



明月はあいかわらず、閑古鳥が鳴く状況でぼけっと机に座っていた。すると、ばたばたと人の気配。中をのぞいたのは、年配のおばちゃん、明月と目があうと幽斎のことを訊いた。どうやら、常連さんのようだ。しばらく、体の調子を崩して休んでいると伝えるとさっさと、おばちゃんは机の前の椅子に座りこむ。

「張り紙がしてあって、こちらで見てもらえって……。お弟子さんなの？」

「え？……ああ、はい。」

いつのまに、張り紙が……。明月は思いながら、おばちゃんの相談を聞く。そのおばちゃんがかえったあと、次々と客が来る。皆、幽斎の常連さん、ばかりだ。どいつも、こいつも、くせものばかりだ。明月は、幽斎のすごさを痛感した。まったく……。本当に勉強になりますと、最後の客が帰ったあと、一息いれながら思う。

外で声がした。数人の足音。

「あ、どうぞ。お先に。」

「いいんですかあ。あ、休憩時間待ってるだけなのかな？」

「ええ。そんなところ。」

順番を譲る声がして、まだ、いたのかと明月が座りなおす。

「こんにちわあ。この間の先生が言ったとおりになったでえ。」

「あ、この間の子たち。今日はどうしたの？」

ばたばた……。と三人。ハーブティに釣られてやって来た子たちだ。

「あのなあ……。聞いてよ彼氏のことなんだけど……。」

と、相談がはじまる。占いが終わり、彼女達が嬉々として帰っていったあと、ひょこっと莉々が顔を出した。

「こんにちは。差し入れ持ってきました。うさぎさんは？」

莉々は時々、ふらっと訪れるようになっていた。彼女は、式神うさぎをいたく気にいって、それとセットで明月のことも気になるようだ。また、みょうなやつに懐かれたなど、明月は思い。ふと、珍しく及び腰のうさぎの姿を思い出し、にやっと笑いながら、うさぎを呼び出した。

「もこもこ。」

すっと宙にうさぎの姿が現れる。そこに莉々の姿を見ると、反射的に逃げの体勢をとっている。それでも、おやつのマドレーヌを彼女が差し出すと、受け取りむしゃ、むしゃ食べ始める。咀嚼しながら、しゃべるうさぎ。

「……。むお、と、と、ちが……。と……。明月……。用は？」

「あ、ちょっと待ってて。いま、造るから……。」

明月は、荷物の中をさぐる。あるものを取り出すと、机の上で作業を始める。ああでも、ない、こうでもない、どういう順番だっけか……。

莉々が寄って来てのぞく。

「折り紙？何を折っているつもりなの？・・・船？」

「・・・・・・・・いや、鶴。」

「折り方、違うから・・・。」

「そう・・・・・・・・。」

仔細をさっしたらしく、莉々が横合いから、折り方を教える。やっと、完成した。

「・・・・・・・・下手ね。」

まるで、折り紙を知らない外国人が始めて折ったようだ。どうやったら、こんなにバランス悪く出来るのだろう。左右の翼の太さがちがう。莉々はそれでも、自分がやるとは言わず、もうひとつ完成させるために、明月が悪戦苦闘している横で、見ている。

出来上がったふたつの折鶴が机にのっている。

「気持ち伝わるといいわね。」

「・・・・・・・・。」

不恰好な折鶴を、もこもこに持たせる。

「今日俺のところにたくさんの客が来た。皆、幽斎さんを待っている人達で、ようすを訊いた。たくさんの人たちがあなたの帰りを待ってますって、伝えてくれ。」

「うさ急便、なのだ。」

式神うさぎは、姿を消した。

「俺、これから利休庵に行くんだけど、いっしょに行くか？」

「ええ。」

莉々を連れて、利休庵へ。

カウンターに座り、のんびりとしていると、からんからんとベルの音。辻が入って来た。

「あ、明月さん。この間のお寺、苦情がありました。」

「・・・・・・・・もしかして、掛け軸か？」

明月がやっぱりか・・という顔をしている。お寺で、最後にやってきた武士は、掛け軸に描かれたものだったのだ。最期のその姿をどういうつもりで映しとったものか、本人の無念と呼応して、そこに魂が縫いとめられていたのだ。昇天してしまったから、もしかしたら、絵そのものが駄目になったのかもしれない。辻は、それを聞くと、う～んと唸り、でも首を振る。

「絵は古いから薄れても構わないんだそうです。それより、幽霊がでる・・・というのが密かな売りで、観光資源だったらしく、呼び戻してくれってクレームです。」

「ああっ？呼び戻せえ？・・・無理だよ。俺はいたこじゃない。」

明月が叫ぶ。それでも、ふと頭をよぎった考えに、ぼんと手を打ち、代わりにものを憑けると言った。辻が首をひねる、その目の前に、ごそごとジャケットのぽけっとから、数珠ブレスレットのようなものを取り出す。時々数珠ブレスレットをしている人を見かけるが、少し違う。玉が自由に、取り外し出来るようになっている。ひとつを取り出し、また、式神うさぎを呼び出す。それを憑けて来いと命じる。それから、マスターから、便箋をもらう。

「毎日の読経の声を聞いて、あの絵の主は成仏する気になったと言っていました。その替わりといっちはなんですが、また、新たに道で拾った迷える霊が救われたがっているので、どうかお

寺へ置いてやって下さい。害はない奴ですが、大勢の人に話を聞いて欲しいやつなので、人の集まる御院内は、最適だと判断し和尚様におまかせします。今後は、それにも経を聞かせてやってください。また、和尚様のありがたいお経と説教を生きている方にもぜひ、聞かせてやってください。・・・と。」

ぶつぶつ口のなかで唱えながら、明月は書いている。

出来上がったメモ書きのような手紙を、封筒に入れ、辻に渡す。

辻は、受け取りながら、ほとんど詐欺だな・・・と心の中でつぶやく。あのままあそこで、成仏出来ないのも可哀相だからいいかと、明月の案を肯定する。

だいたいあの寺へ集まってきていた霊を成仏させてくれというのが依頼内容で、あの武士だけは例外だなんて、変な話だ。仕事はきちんとかなしたし、公的機関なので、本当はアフターケアがどうか、まあいいかと思う。それを、持って出かける辻と入れ替わりに、鴨居がまた、野々宮を連れてやって来た。

「いやあ。どうも、また、怪しい物納、物件の解決をふられてしまって・・・。」

「そりゃまあ、気の毒に・・・。」

マスターも明月も野々宮を慰める。

妙な事件は、野々宮に押し付けられればいいと思われた。以来、野々宮も、たまに、ここを訪れることがある。

闇の中に静まり返ったお寺の中。・・・・・・・・・・・・・・・・。ふわっと、宙にあらわれたうさぎが手に持った玉を床の間に飾られた絵の前に置く。

玉から、煙のようなものが立ち昇り、人のかたちを象った。着物を着た三十過ぎぐらいの男。きょうきょろとあたりを見回す。

「ここは・・・。」

玉のなかで眠っていたら、声が聞こえた。ここにおいて、念願を果たせ、と。男の前にうさぎが立っている。

「主から伝言なのだ。ここは、お寺だから沢山人が集まる。存分に話を聞いてもらえ。満足したら、ちゃんと成仏しろよ。」

「はあ、なるほど・・・。」

「あ、それから、もし、悪さしたら、酷い目に合わすぞって。」

「ひえええ。」

見てくれはかわいいうさぎの生き物ならぬ、魔的な光りを放つ目。

見つめられて、男は怯えながら、こくこくと頷いた。

「満足いくまで、小唄を聞かせて観光客を喜ばせるのだ。じゃあな。」

うさぎは、唄家の霊をそこに置いて、もときた式神が通る道を帰ってゆく。

「ああ。今日はいい仕事したあ……。帰ってケーキセット頼もうっと。」

うさぎが飛び跳ねながら帰って行く。

万怪異お悩み解決します……。とは、看板に掲げていないが、町家風の佇まい喫茶「利休庵」、京の街角にはそんな場所がある。

おわり

別名分室陰陽寮利休庵 2

<http://p.booklog.jp/book/51515>

著者：みん兎

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokinoizumi3/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/51515>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/51515>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ